

南都における平安時代前半期の土器様相

一土師器の供膳形態を中心とした編年試案一

三好 美穂

I はじめに

大和盆地の北部に位置する奈良市の中央部は、奈良時代の都平城京域とほぼ重なりあっており、発掘調査で検出される遺構・遺物は8世紀代のものが大半をしめている。8世紀末に長岡京、平安京へと相次いで遷都すると、旧平城京域内ではその時期の遺跡や出土遺物が減少してしまう。しかし、都が移ったとはいえ、平安京からみて後に「南都」¹⁾と称されるように、社寺を中心とする都市的景観は維持されている。南都に住む人々の生活が続くように、土器型式も連続して発展していることはいうまでもないことである。

これらの土器様相を理解するために、先学諸氏により幾つかの土器編年案²⁾が呈示されたが、従来の資料量では限界があり、詳細な土器様相を把握するまでには至らなかった。

だが、近年の発掘調査の増加に伴い平安時代前半期の土器の一括資料が発見されるようになり、今まで不明瞭だった部分も序々に明らかになりつつある。既に幾つかの資料は公表³⁾され、各土器群の時間的な相互関係や平安京との時期関係も思索され始めている。

本稿では、まだ十分な資料量とは言い難いが、これらの資料をまとめ、蓄積されてきた平城京廃都後(784年)から11世紀初頭頃までの土器資料を型式的に編年し、平安京の編年との比較検討を行いたい。

II 土器群の様相

旧平城京域においても、土師器・黒色土器・須恵器・施釉陶器など様々な土器類が出土する。その中でも編年の基軸とした遺物は、型式的まとまりをもつ資料例が豊富で、いつの時代でも量的にも多く、対象とした地域内において普遍的に出土する土師器の供膳形態⁴⁾である。本稿は8世紀末～11世紀初頭頃に限っての編年試案だが、今後その前後の時代とのつながりを考える際に最も有効な資料になると思われるからである。

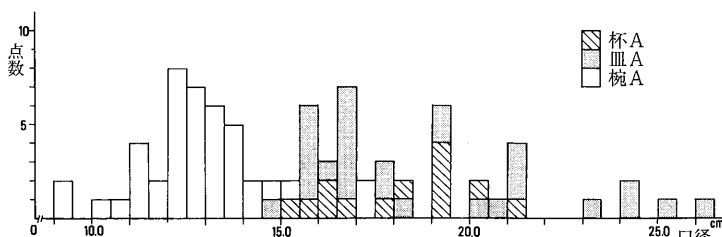
また、他の土器、陶磁器に関しても、土師器と共伴して一括出土した資料を中心に概観していきたい。

ここで取り扱う土器群は、製作技術・法量・形態の特徴・組成から大きくⅢ期に分けることができる。まず最初に、時期や量的にまとまりがある土器群を選択し遺跡ごとに概観⁵⁾した後、Ⅰ～Ⅲ期における土器の形態・製作技術の特徴や変遷を追うことにする。

南都Ⅰ期 この時期に相当するものとして、10例を挙げる。

①平城京右京二条三坊四坪（第276次調査）S E 503掘形出土土器⁶⁾（第1図・第1表）

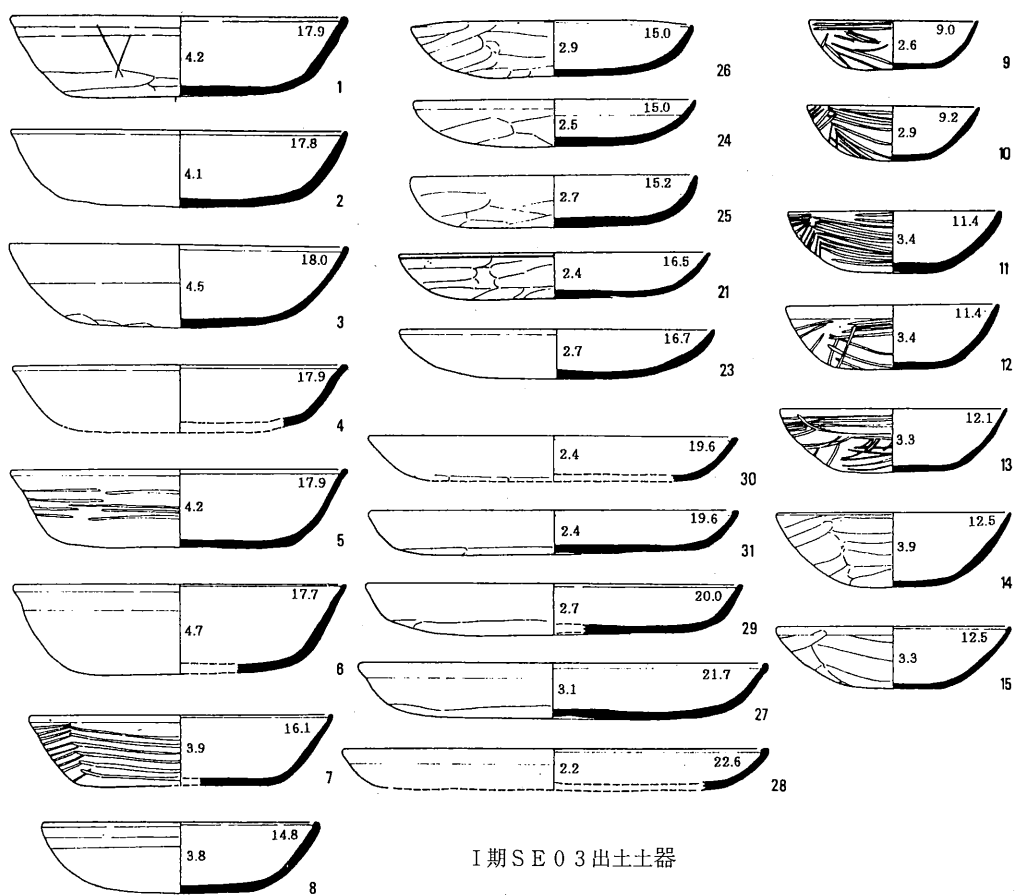
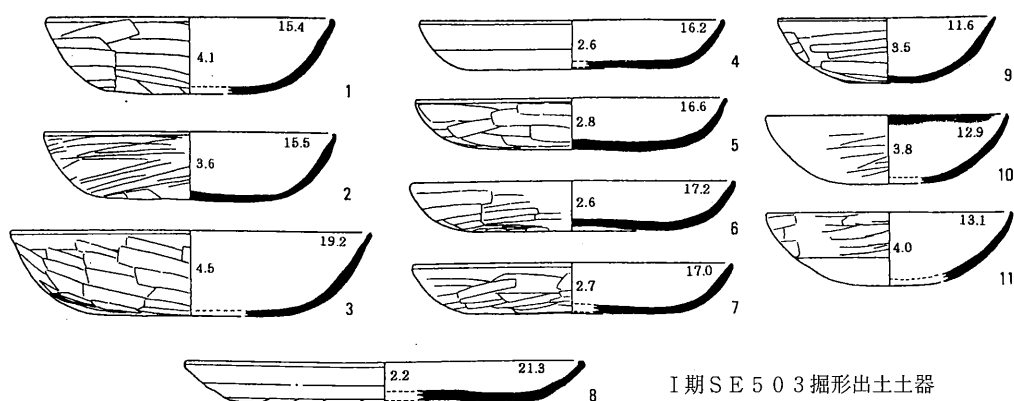
近鉄西大寺駅南周辺土地区画整理事業に伴う調査で検出した井戸S E 503の掘形から出土した土器群である。土師器杯AⅠ・杯AⅡ・杯蓋・皿AⅠ・皿AⅡ・皿C・碗AⅠ・碗AⅡ・碗C、黒色土器A類、須恵器、緑釉単彩陶器⁷⁾がある。土師器杯・皿の形態は、口縁端部が内側に小さく肥厚するものが主体をな



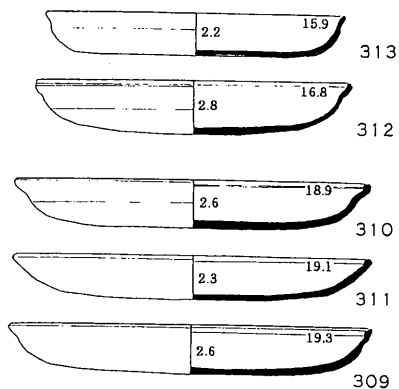
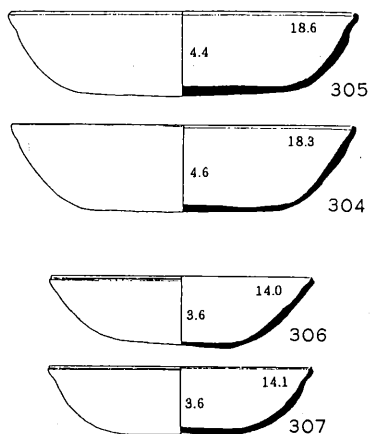
す。杯Aは、口径15.2~21.0cmのものがあるが、19.0cm（杯AⅠ）がめだつ。大半がc手法で調整されている。皿Aは、口径14.5~26.0cmのものがある。口径15.5~16.5cm（皿AⅡ）と19.0cm（皿AⅠ）に集中している。c手法が多いが、a・b手法のものが少量ある。碗Aは、口径9.0~15.0cmのものがあるが、12.0~13.9cm（碗AⅠ）に集中している。c手法のものが多く、大半は磨きが施されている。平城宮土器⁸⁾Vの土器群と比べ、杯・皿の口径の大きさの中心が、若干縮小する。

②平城京左京五条二坊十四坪（第1次調査）S E 03出土土器⁹⁾（第1図・第2表） 井籠組井戸S E 03の枠内埋土から出土した土器群である。平城宮土器編年の平城宮土器Ⅲ~Ⅵが混在しているが、ここでは平城宮Ⅵに相当する土器を抜き出し提示した。土師器には杯AⅠ・杯AⅡ・杯BⅠ・皿AⅠ・皿AⅡ・皿BⅠ・皿C・碗AⅠ・碗AⅡ・蓋・高杯・壺・甕が、須恵器には杯A・杯B・甕がある。土師器の杯や皿形態は、基本的には口縁端部が内側に小さく肥厚するものが中心で、皿AⅡ（23~26）に見られるように、口縁部を丸くおさめるものは系譜を異にしている可能性がある。調整手法は、杯類はb・c手法が多く、皿AⅠは殆どがb手法である。皿AⅡはc手法が主体であるが、b手法のものも一定量含んでいる。ここには載せなかったが、b手法のうち杯Cが皿形化したものもある。本土器群の碗Aは、a3手法のものが比較的多く、口径が12.5cmのものだけがc手法である。色調は、黄灰色ないしは灰褐色を呈し、胎土には砂粒を含むものが多い。本土器群の土師器供膳形態は、平城宮土器Vの土器群と比べると幾つかの相違点が見られる。1つは、口径の法量縮小は少ないが口縁部が開き気味の形態になることである。2つめは、皿AⅠに口径19.5~20.0cmのものが含まれるようになり、法量縮小が認められこと。3つめは、前段階では見られなかったc手法の杯AⅡが認められるようになる。これらのことは、前段階の土器群よりも新しい要素と考えられる。

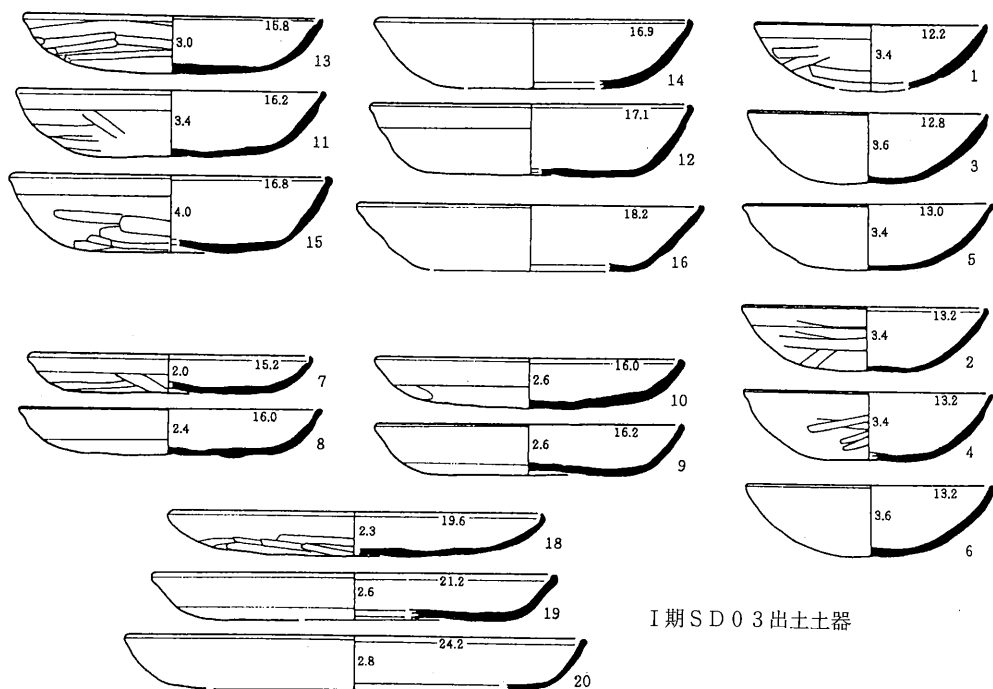
③平城宮北方官衙地域S B 116出土土器¹⁰⁾（第2図・第2表） S B 116の雨落溝から出土



第1図 SE503掘形・SE03出土土器 (1/4)

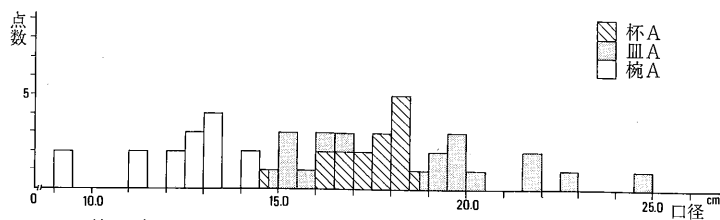


SB116出土土器



I期SD03出土土器

第2図 SB116・SD03出土土器 (1/4)



第2表 土器口径分布 (SE03・SB116・SD03出土)

した土器群である。土師器杯AⅠ・杯BⅠ・杯BⅡ・杯蓋・皿AⅠ・皿AⅡ・碗AⅠ・壺E・甕などがある。杯・皿・碗の調整手法は、すべてc手法である。杯AⅠ305・304は、この時期のものとしては口径に対して器高が高くやや古い様相を残す。平安京の出土資料のなかにも同様な形態のものが少数ある。

④大安寺旧境内苑院推定地（6BDA-28次調査）S D03出土土器¹¹⁾（第2図・第2表）

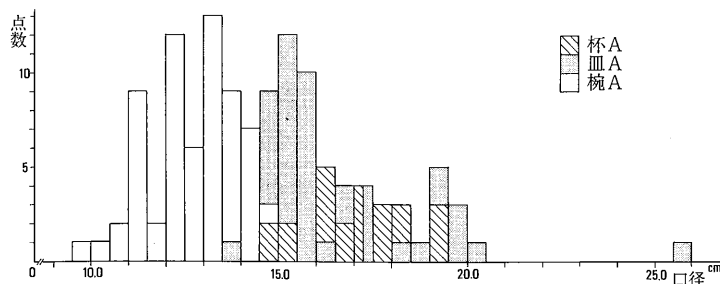
苑院推定地内の東端で検出された東西方向の素掘り溝S D03から出土した土器群である。土師器杯AⅠ・杯AⅡ・皿AⅠ・皿AⅡ・皿BⅠ・碗AⅠ・壺E・甕、黒色土器A類杯、須恵器杯A・杯B・杯蓋・壺A・壺L・甕、緑釉単彩陶器碗・羽釜がある。供膳形態では、須恵器が減少傾向を示しており土師器が主体を成している。黒色土器A類杯は、口縁部下半に丸味をもち器高の高いものが中心を占める。黒色土器A類がまとまって出土した例としては最も古い段階の資料である。

土師器の供膳形態では、杯A・皿A・碗Aが主体を占め、基本組成をなしている。皿Bは少量しかない。器表面が摩滅しているものが多く調整手法がわかるものが少ないが、杯A・皿A・碗Aでは、c手法が主体である。杯A・皿Aの口縁端部は、すべて内側に小さく肥厚している。暗赤褐色系の色調を呈し、胎土には雲母や砂粒が混じるものが多い。杯AⅠは、口径16.0cm大のものが多く出土しており、この時期としては比較的縮小化が進んでいる。だが、後述するS E311B出土土器群と比べると法量は近似しているものの、口縁部の外傾度は緩く古相を示すものが多い。

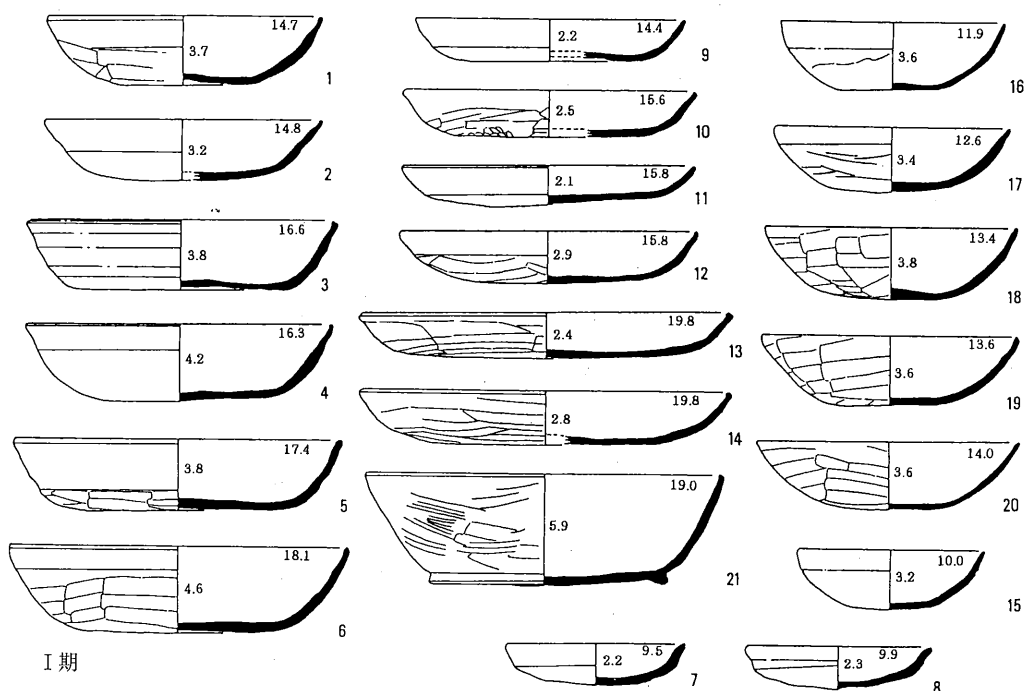
⑤平城京右京二条三坊四坪（第276次調査）S E503枠内出土土器¹²⁾（第3図・第3表）

前述したS E503と同一の井戸で、枠内から出土した土器群である。土師器杯AⅠ・杯AⅡ・杯B・杯蓋・皿AⅠ・皿AⅡ・皿B・皿C・碗AⅠ・碗AⅡ・碗C・壺B・鉢・甕、黒色土器A類杯、須恵器杯A・杯B・杯蓋・壺A・壺G・壺L・壺M・鉢・甕がある。土師器杯Aは、口径14.8～19.0cmのものがあり、16.0～18.5cm（杯AⅠ）のものがめだつ。碗Aは、口径9.9～14.5cmのものがあり、11.0～11.5cm（碗AⅡ）と12.0～14.4cm（碗AⅠ）に集中する。皿Aは、皿AⅠよりも皿AⅡの方が量的に多く、特に口径14.5～16.0cmのものに集中する。調整手法はc手法が多いが、杯・皿には若干a・b・e-c手法などが見られる。先

述したS E503掘形出土土器と比べると杯・皿類の法量は確実に法量縮小しているが、碗Aは逆に口径が大きくなったものが増える。



第3表 土師器口径分布（SE503枠内出土）



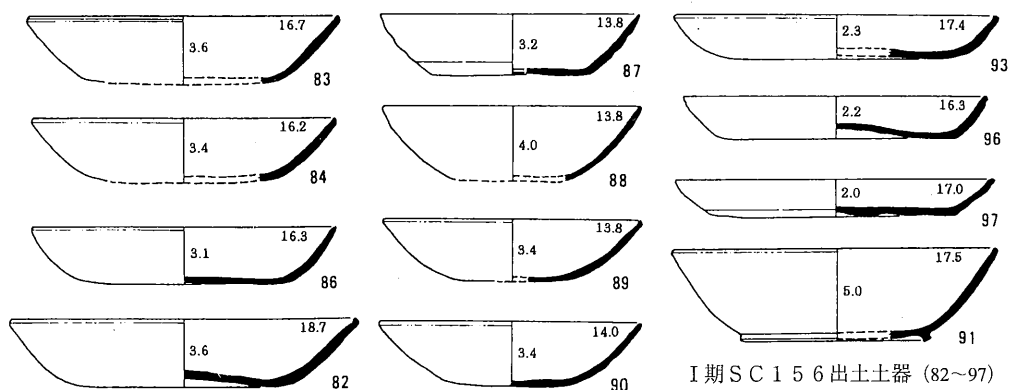
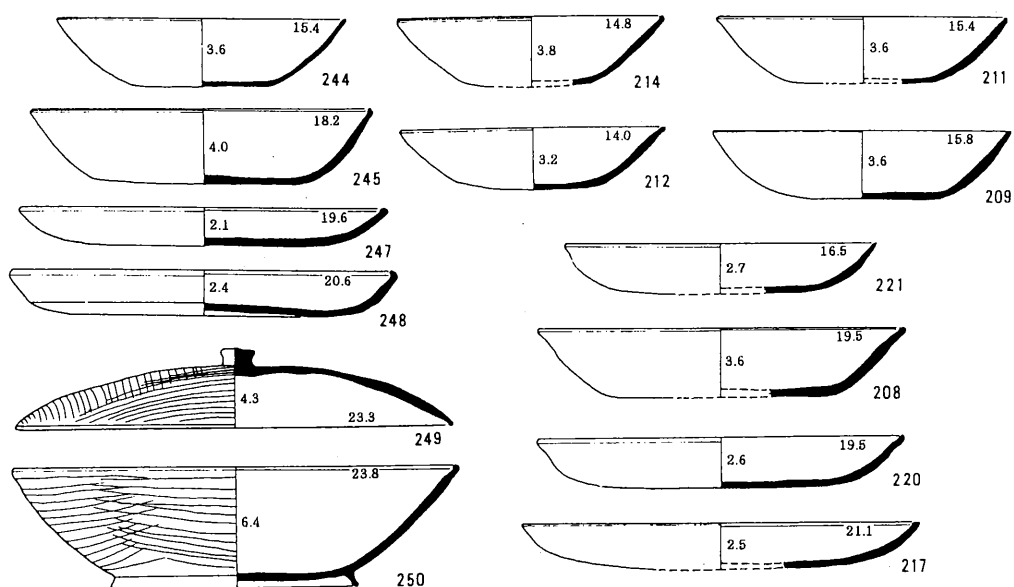
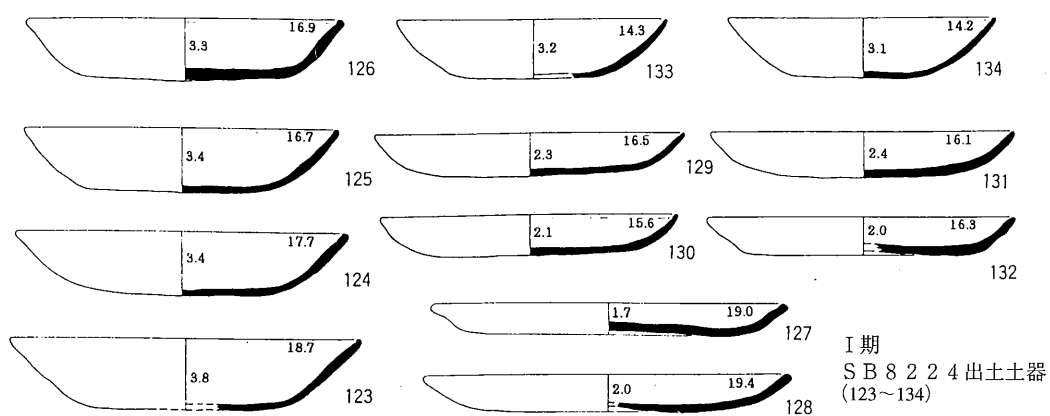
第3図 SE503枠内出土土器

⑥平城宮内裏殿舎地区S B 8224出土土器¹³⁾(第4図・第4表) S B 8224の柱掘形から出土したもので、平城上皇が平城宮に還都した当時の土器として考えられている。大半が土師器で、他に少量の須恵器、緑釉陶器がある。

土師器には、杯A I・杯A II・杯B・杯蓋・皿A I・皿A II・皿B・碗A I・高杯・盤B・壺A・甕がある。調整手法は、大半がc手法だが、杯A II 126・皿A II 132 だけがf手法による¹⁴⁾。皿Aの口縁端部は、小さく巻き込んでおさめられたものが中心である。各器形とも平城宮土器V期頃のものとは比べ口縁部が開く傾向が顕著である。胎土はII群系のものが圧倒的に多く、f手法のものだけがI群土器である。これらの土器群は、平安京土器編年I期—中段階に位置づけられている北野廃寺S D 08出土土器群とほぼ同じ様相を呈しており、c手法が主体をなす製作技法及び器形の組成でも類似度が高いことが指摘できる。しかし、口縁部の形態の特徴などは後述する平城宮北方官衙地域で検出されたS E 311Bに通じる新しい傾向を示すものが中心である。

⑦平城宮内裏内郭東垣S A 248 出土土器¹⁵⁾(第4図・第4表) S A 248の柱抜き取り穴から土師器杯A I・杯A II・杯B I・杯蓋・皿A Iが出土した。皿A Iの248だけがa手法で、他はc手法による。杯Bと杯蓋には磨きが施されている。

⑧平城宮内裏外郭東面築地回廊S C 156 西側雨落溝出土土器¹⁶⁾(第4図・第4表) 奈良時代後半から平安時代初頭にかけての土器が出土しているので、平安時代に属する土器を抜

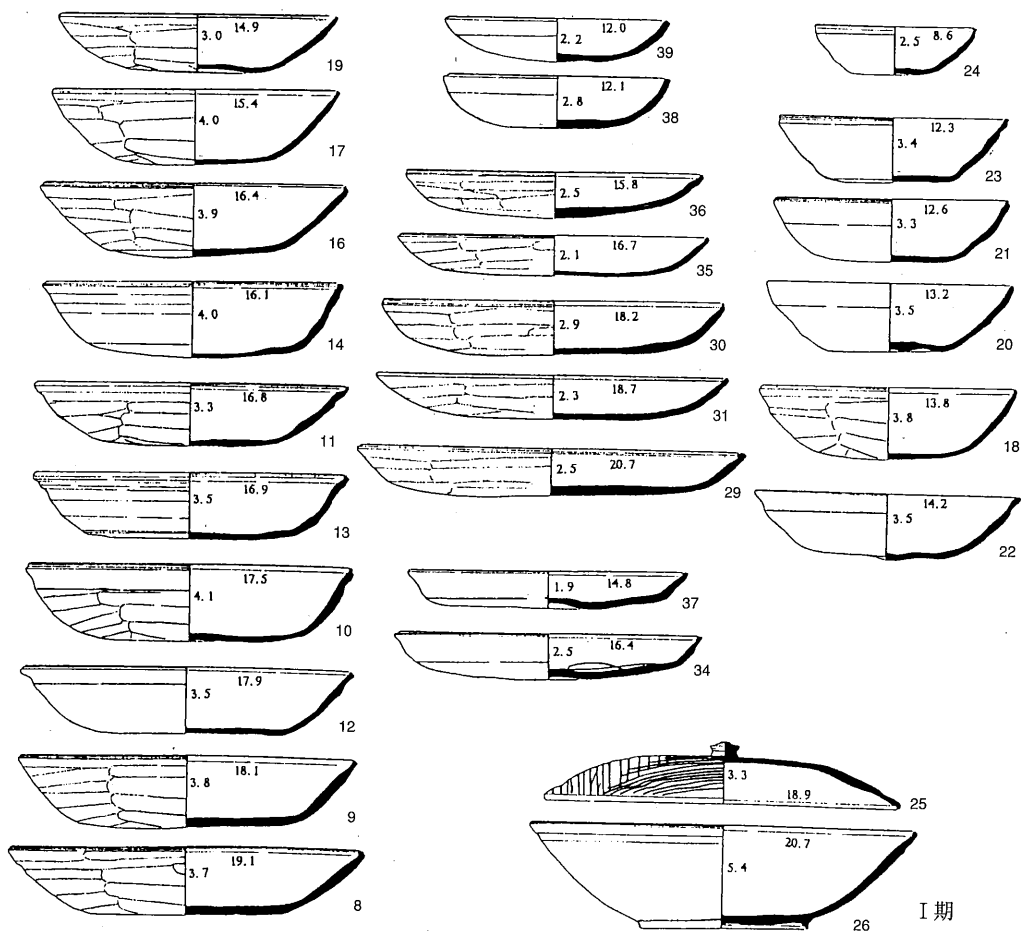


第4図 SB8224・SA248・SA4760・SC156出土土器 (1/4)

き出し提示する。土師器には、杯AⅠ・杯AⅡ・杯BⅠ・杯蓋・皿AⅡ・皿B・皿C・碗AⅠ・壺A・壺B・甕がある。この他に、須恵器杯A・杯B・杯蓋も出土している。土師器の杯・皿類は、大半がc手法だが、87・96・97はf手法による。杯Bは、口径22.2cm、器高7.8cmを測り、外面にはへら磨きを施すものがある。基本的な土師器の供膳形態が揃った良好な資料である。

⑨¹⁷⁾平城宮内裏S A4760出土土器（第4図・第4表） 御在所の西側の柱列S A4760の柱抜き穴から出土した土器群である。大半を土師器が占めており、須恵器は少ない。

土師器には、杯AⅠ・杯AⅡ・杯BⅠ・杯蓋・皿AⅠ・皿AⅡ・碗AⅠ・碗C・壺E・甕がある。この土器群の杯A・皿A・碗Aも殆どc手法である。ここには掲載しなかったが、皿AⅠ217・220以外に、形態の特徴から奈良時代のもと考えられる皿が混入していた。碗Aには、口径が14.0cm（碗AⅠ）のものが見られる。器高が若干浅くなり、口縁部が広がる傾向を示す。杯も碗同様に口縁部が広がる傾向をしめしており、杯A・碗Aの

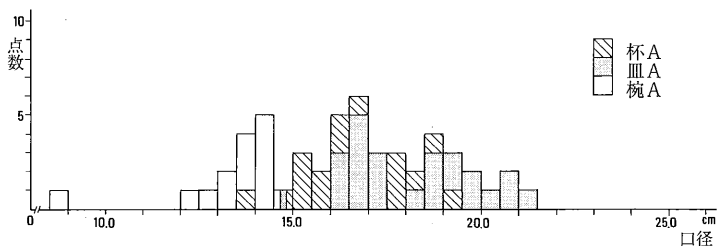


第5図 311B出土土器 (1/4)

形態が近似してきている。椀Cの出土量は平城宮土器V以前のものと比べると極めて少なくなっている。皿AⅠの法量等で、後述するSE311Bより古いとも見られる様相を残すが他の要素の類似度からは併行する資料と考えられる。

⑩平城宮北方官衙地域SE311B出土土器¹⁸⁾ (第5図・第4表) SE311Bは、SE311Aが放棄されたあとに井戸枠を構築しなおして再利用された井戸である。枠内から土師器杯AⅠ・杯AⅡ・杯BⅠ・杯蓋・皿AⅠ・皿AⅡ・椀AⅠ・椀AⅡ・壺E・高杯・鉢B・甕、黒色土器、須恵器、山城産平高台の緑釉陶器椀の他に、隆平永宝、木簡が出土した。

土師器の杯・皿は、大半がc手法で調整されている。皿37だけはe手法であり、皿34はf手法で暗文の特徴などから河内産の可能性が考えられる¹⁹⁾。杯では12がe手法で、13・14はf手法である。13・14は、皿34同様に大和産のものではない可能性がある。椀Aは、c手法とe手法がある。杯・皿・椀のc手法のものも、へら削り間になでや指頭圧痕による凹みが認められ、e-c手法と確認できるものがある。口縁部上端部が強い横なでの結果による外反度の大きいものも多く、さらに器壁が少し薄くなったことも指摘できる。杯Aは、口径が14.9～19.1cmのものがあるが、量的な中心は16.0～17.0cm(杯AⅠ)にある。先に記した一群と比べると、杯AⅠが法量縮小化の傾向を示している。形態面でも大小通じて口縁部の開きが強くなったものが中心を占めている。中でも口径14.0～16.0cmの杯AⅡは底部がやや小さくなり、口縁部の開きが強く椀Aに近い形態を示すものが確認できるようになる。平安京北野廃寺SD08併行時期やそれ以前の古い資料では見られないものであり、この時期の大きな特徴を示すものである。皿AⅠは口径18.0cmのものが増えており、皿AⅡも口径14.8cmのものが見られ皿Aも杯Aと同じように法量縮小及び口縁部の外傾度が強くなる傾向が伺われる。



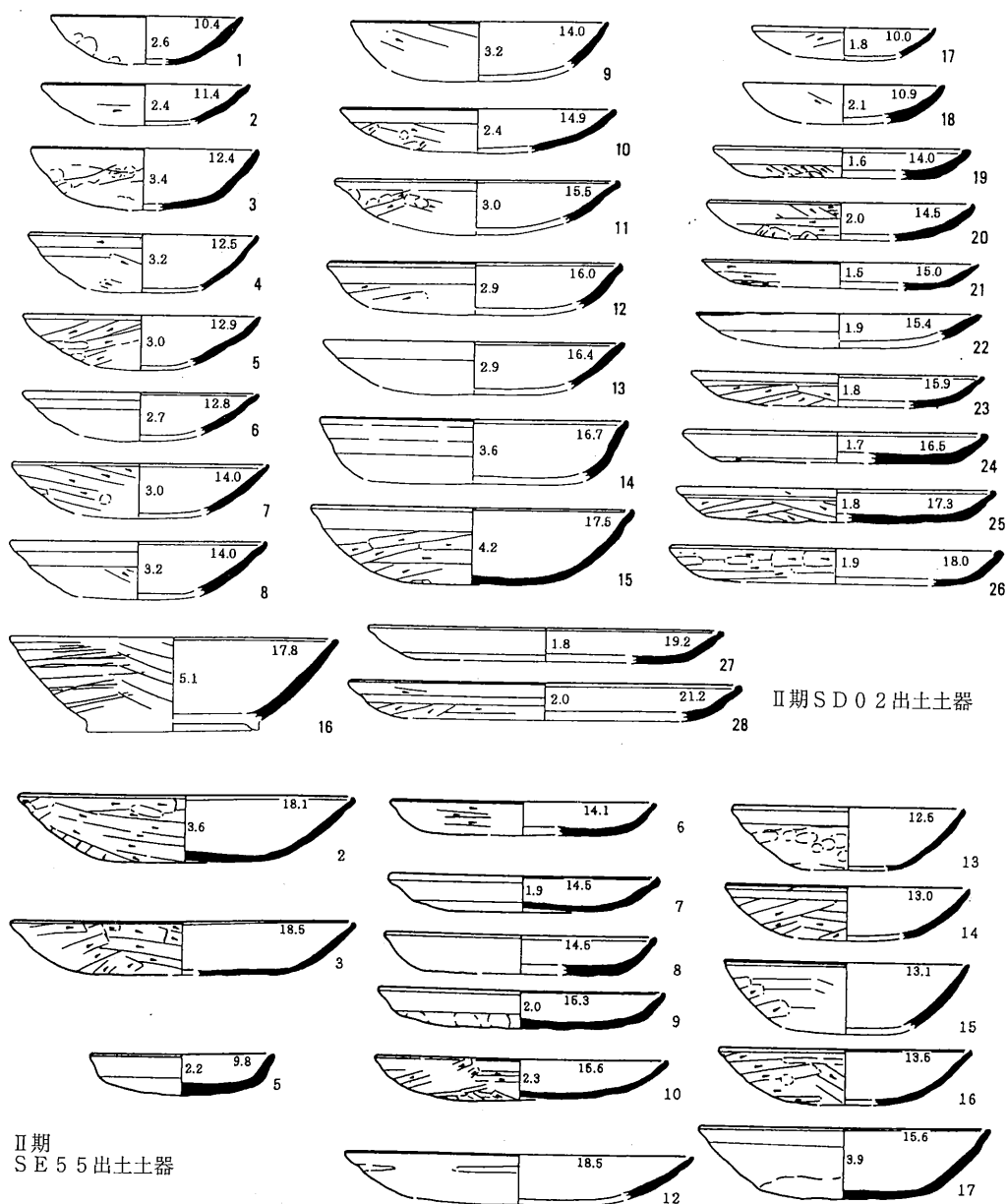
第4表 土師器口径分布 (SB8224・SA248・SC156・SA4760・SE311B出土)

南都Ⅱ期 出土量が多く残存状態も良好な土器群が多い。14例を列挙する。

⑪平城京左京一条四坊五坪(第307次調査)SD02出土土器²⁰⁾ (第6図・第5表) 五坪内で検出された南北方向の素掘りの溝SD02の埋土から出土した土器類である。出土土器には、平安時代の土師器杯AⅠ・杯AⅡ・杯BⅡ・皿AⅠ・皿AⅡ・椀AⅠ・椀AⅡ・高杯・甕黒色土器、須恵器、緑釉陶器、灰釉陶器、奈良時代の土師器、須恵器、奈良三彩がある。黒色土器は、高台の付かないA類杯が主である。須恵器は伝統的な形態の杯Bであるが、体部が開いた浅い椀形を呈したものがある。緑釉陶器は山城産の平高台椀、灰釉陶

器は角高台の付く猿投窯K-14号窯式段階の椀である。

土師器杯・皿・椀の約70%がc手法で、残り30%はe手法である。c手法のものでは、へら削りの間になでや指頭圧痕のくぼみを確認できるものが多く、e-c手法として扱っているものが主体である。口縁部上半が強く横なでされているため、外反ぎみの形態を呈するものが多くなる。椀A Iは、口径12.5~13.0cmと14.0cm大のものに集中して分布して

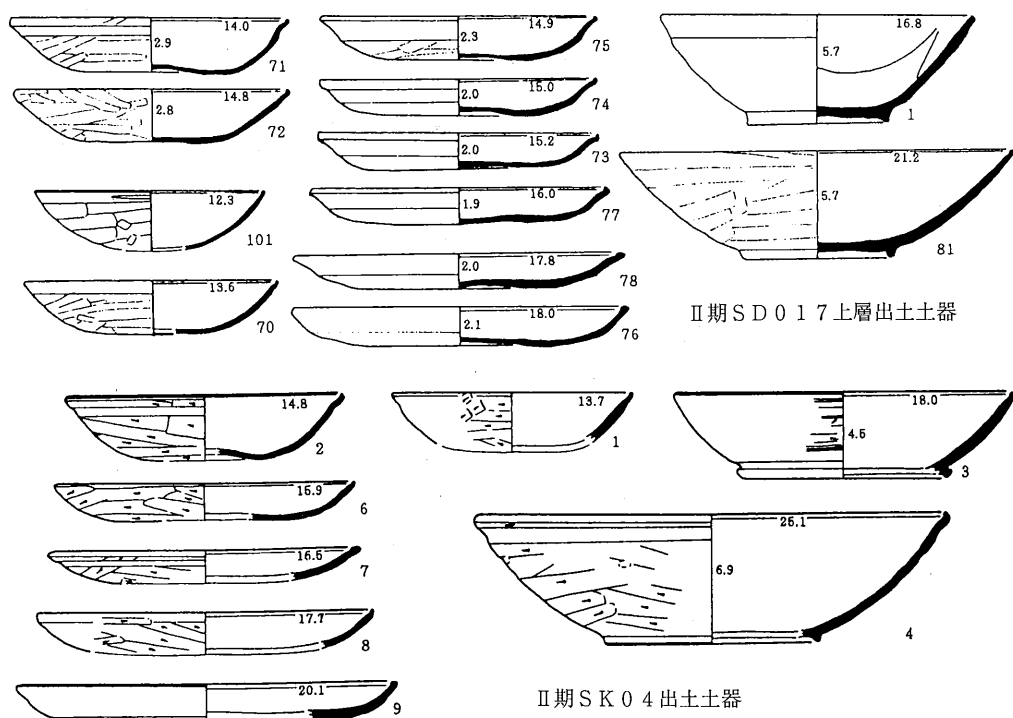


第6図 SD02・SE55出土土器 (1/4)

いる。皿は、口縁端部が内側に小さく肥厚するものと丸くそのままおさまるものがあるが、大半のものは前者の形態である。杯・皿とも口径が14.0~17.0cm（杯AⅡ・皿AⅡ）に集中しているが、皿には、20cmを越す大型のものが僅かながら存在している。器形の大・小に関わらず、器壁がやや薄いものが多くなっている。

⑫平城京左京二条四坊十一坪（第180次調査）S E 55出土土器²¹⁾（第6図・第5表） S E 55の井戸枠内埋土から出土した土器群である。土師器杯AⅠ・杯AⅡ・杯BⅠ・杯蓋・皿AⅠ・皿AⅡ・皿C・椀AⅠ・ミニチュアの高杯、黒色土器、須恵器がある。この遺構は、須恵器の出土比率が高く、全体の40%近くが須恵器であった。土師器杯Aは、口径18.5cm前後のもの（杯AⅠ）と16.0cm前後のもの（杯AⅡ）とに分かれる。皿は、口径14.0~16.0cm（皿AⅡ）に集中している。20.0cmを越す皿はないが、18.5cm（皿AⅠ）のものがある。杯・椀は、e-c手法が多いが、皿にはe手法で調整されたものが出土している。杯・皿・椀の口縁端部は、大半のものが内側に小さく肥厚する。杯Aの中には、口縁部のたちあがりなどに古い要素を残したものがあり、混入の可能性が考えられる。

⑬平城京左京八条三坊（6ATI-4次調査）東堀河S D 017上層出土土器²²⁾（第7図・第5表）平城京東市跡推定地内で検出した東堀河の埋土上層からの一括土器である。土師器杯AⅠ・杯AⅡ・杯BⅠ・杯BⅡ・皿AⅠ・皿AⅡ・皿C・椀AⅠ・高杯・甕、黒色土器、須

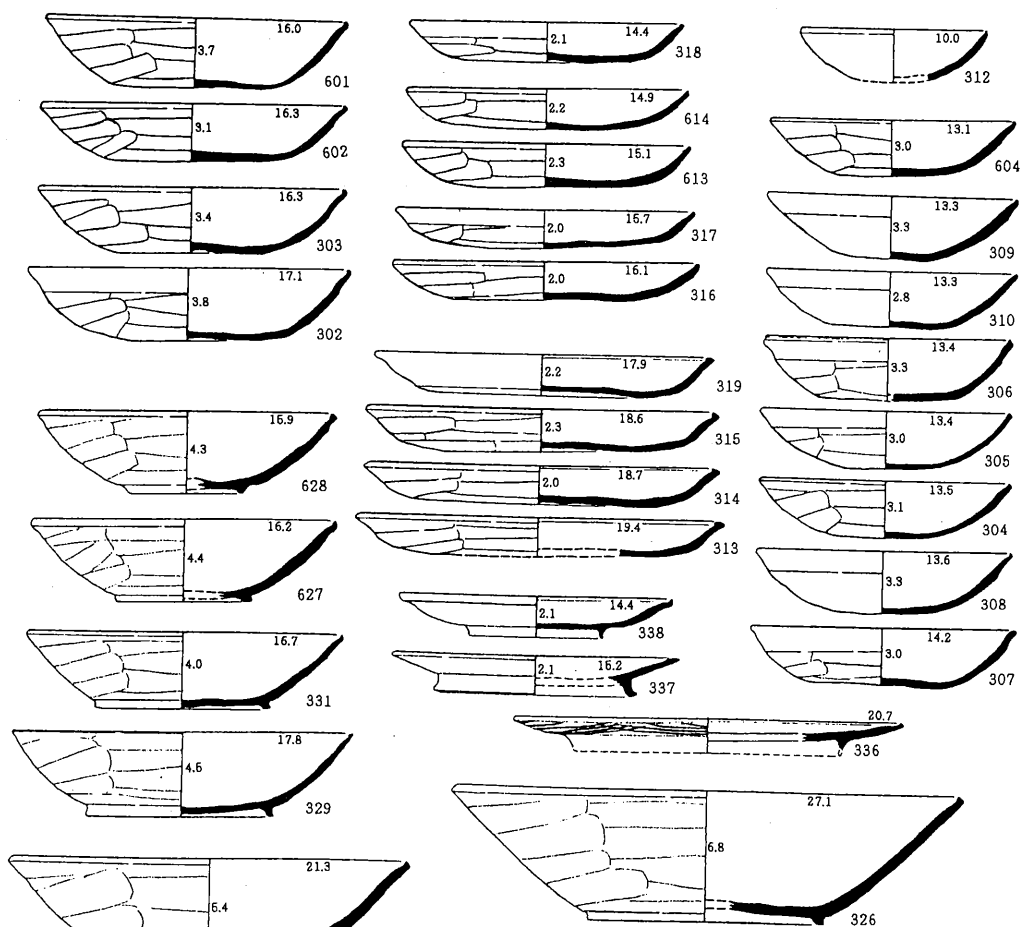


第7図 SD017・SK04出土土器（1/4）

恵器、山城産平高台の緑釉陶器碗がある。土師器杯・皿の調整は、約90%のものがe-c手法である。稀にe手法がある。Ⅱ期に属す杯・皿は、Ⅰ期のものと比べると、若干器壁が薄くなっている。皿AⅡの75~77は特に顕著である。

⑭大安寺旧境内(6BDA-60次調査)西太房跡SK04出土土器²³⁾(第7図・第5表) 西太房の北西隅部分で検出した土坑からの一括土器群である。土師器杯AⅡ・杯BⅠ・杯BⅡ・杯蓋・皿AⅠ・皿AⅡ・碗AⅠ・甕、黒色土器A類甕、須恵器がある。

土師器杯・皿は、c手法のものが中心をしめる。碗Aもc手法が主体である。磨きはみられない。杯BⅠは、Ⅰ期に属する杯Bの高台よりもかなり小さく低くなっている。皿Aは、口径15.0~16.0cm(皿AⅡ)に集中しているが、20.0cmをこす大型のものが僅かに存在している。大型の皿9は、e手法で調整されている。口縁端部は、いずれも内側に小さく肥厚しているが、7は内側に大きく巻き込んでつくられている。



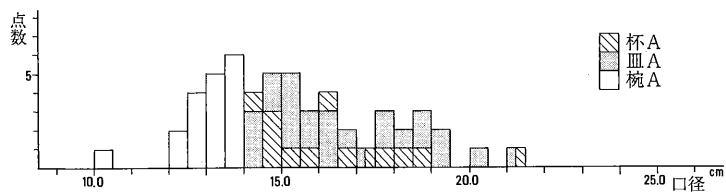
Ⅱ期SD650A出土土器(600番代はSD650B出土)

第8図 SD650出土土器(1/4)

⑮平城京東三坊大路S D650A出土土器²⁴⁾(第8図・第5表) 昭和44年度に行われた調査で東三坊大路東側溝は、平安時代に2回の改修工事を受けていることが明らかになった。古い方の溝をS D650A、新しい方の溝をS D650Bと呼称している。S D650AとS D650B間は、随所で攪拌している箇所もあるが、「2時期の土器にはそれぞれまとまりがあり、S D650Aの主体をなすものをS D650A様式、S D650Bの主体をなすものをS D650B様式」として提示された。²⁵⁾

しかし、様式として示された2つの土器群には混入品が多く見られ、主体をなす土器が明確に位置づけられてなかった。そこで本稿では、S D650AとS D650Bの中心となる土器を提示しておくことにする。

まず、S D650Aの中心をなす土器群をみる。土師器杯A I・杯A II・杯B I・杯B II・杯蓋・皿A I・皿A II・皿B・皿C・碗A I・碗A II・高杯・壺A・壺E、黒色土器、須恵器、緑釉陶器、灰



第5表 土師器口径分布(SD02・SE55・SD017・SD650A・SK04出土)

釉陶器がある。黒色土器はA類の高台のない杯形のものが主体をしめる。緑釉陶器は山城産平高台のものが、灰釉陶器は猿投窯K-14号窯式段階のものが主体である。緑釉陶器や灰釉陶器が数多く共伴することがこの土器群の特徴でもある。

この時期になると、土師器杯と碗の形態が非常に似ており、区別するのが難しくなる。かろうじて、法量の差で分けられる程度である。各器形ともにI期の資料に比べると器壁のやや薄くなったものが中心を占めている。口縁部上端の強い横なでの外反もほぼ定着した特徴となってきている。杯A Iにはこの時期としては珍しく、口径が21.0cmの大型のものがある。杯A IIは、16.0~17.0cmに集中している。調整は、e-c手法である。皿Aの口縁端部の形態は、皿A Iは内側に巻き込むものばかりだが、皿A IIの方は、内側に小さく肥厚するものと丸くおさめられるだけのものとがある。調整は、大半のものがe-c手法である。杯Bも口縁部を強く横なでしたのちに削りを施している。皿Bは、出土例が非常に少なく不明瞭な部分が多い。今回はS D650 Aに位置づけておくが、類例の増加を待って検討していきたい。碗Aは、大半がc手法で、磨きがあるものはない。口縁端部は小さく肥厚するものが主体である。杯蓋も大半がc手法だが、磨かれているものもある。S D650Aでは杯Bも数多く出土している。杯Bも杯A・碗Aと同様に器壁や口縁部形態の変化を示す。杯Bの口径15.0~17.0cmの小型のものでは高台径が若干小さくなったものも含まれるようになり、全体に「碗形化」ともいえる形態変化が明確になる。調整では、口縁部外面にへら磨きを施さないc手法が多くなる。

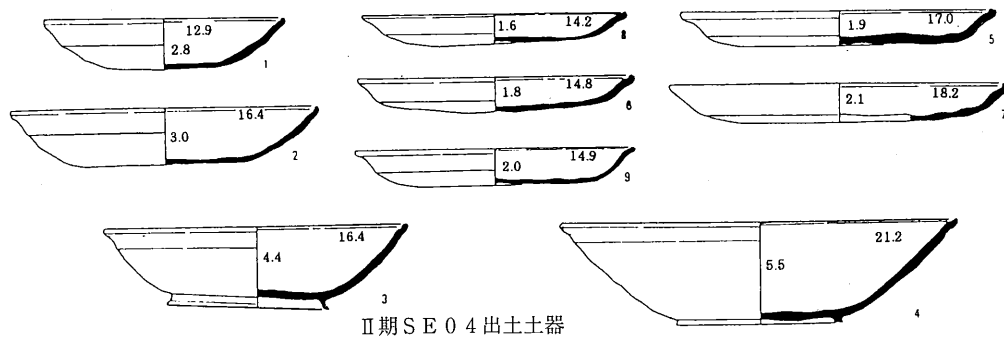
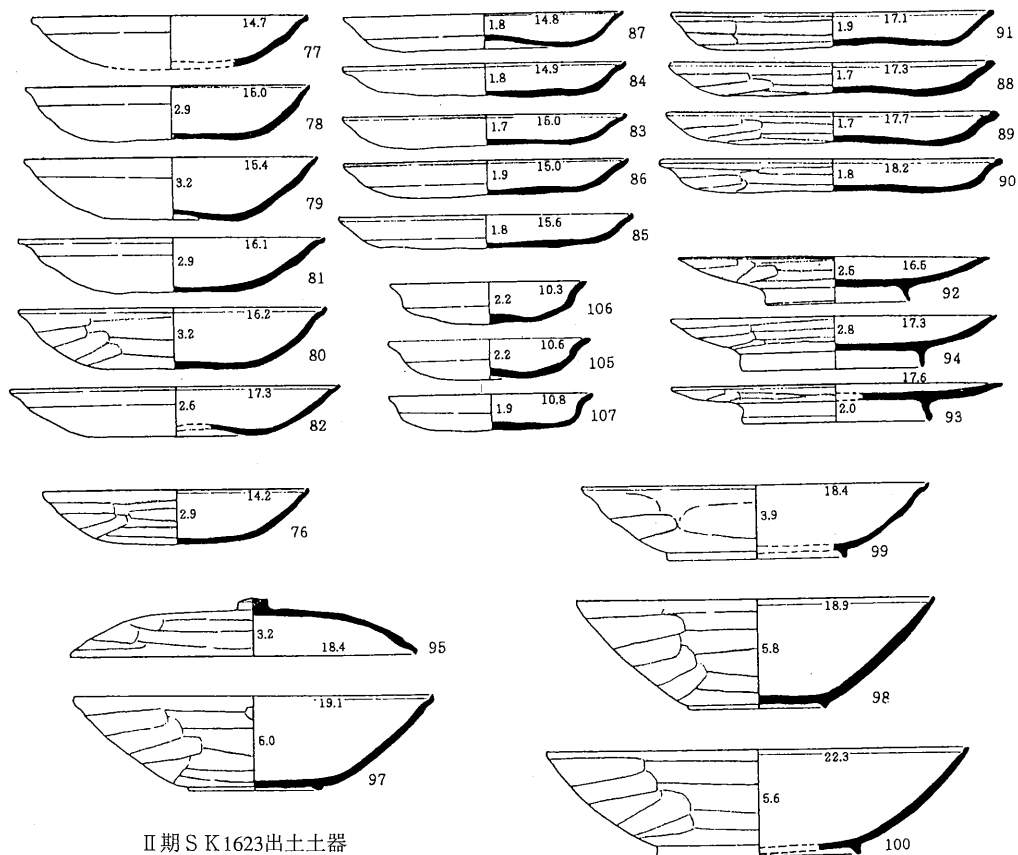
⑩平城宮玉手門S K 1623出土土器²⁶⁾(第9図・第6表) 玉手門の東方約20m地点にある土坑から、総数368個体におよぶ土師器、黒色土器、須恵器、緑釉陶器、灰釉陶器、青磁が出土した。黒色土器A類は高台が付く椀が主体になっている。また、同じA類の鉢・甕なども数多く出土しており、黒色土器A類が出土土器全体のなかで主要な位置を占めるようになっている。緑釉陶器は猿投窯K-90号窯式段階の稜椀とほぼ併行する山城産のものが、灰釉陶器には猿投窯K-90号窯式段階のものが主体をなしている。

土師器には、杯AⅠ・杯AⅡ・杯BⅠ・杯蓋・皿AⅠ・皿AⅡ・皿C・椀A・高杯・甕・竈・罍釜がある。杯Aは、杯AⅠが減少し、杯AⅡが多くなる。口径は15.0~16.0cm(杯AⅡ)に集中する。口径が14.0cm大のもので、形態的には椀Aと区別するのが難しいものが少数出土している。この形態のものは、椀Aの系譜上にあるものと杯AⅡの法量縮小の結果と理解できるものとがある。この遺跡に関しては、杯AⅡの小型化したものと見ておく。調整は、大半がe手法であるが、e-c手法のものが少数含まれる。器高も若干ではあるが浅くなっている。皿AⅠは、c手法で口縁端部は内側に太く巻き込むものが多く、皿AⅡは、e手法で口縁端部が内側に小さく肥厚するものが多い。器壁は薄く仕上げられている。皿Aは、S D 650Aの土器群と比べると全体的に法量縮小が進んでいることが判る。皿B・椀A・杯Bは、c手法である。

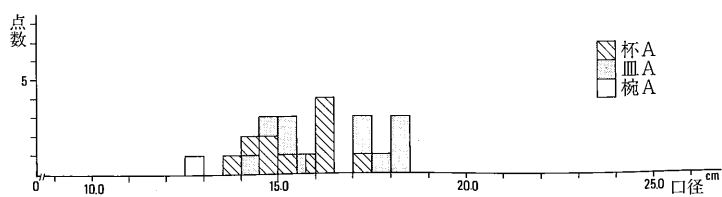
⑪東大寺旧境内西南院井戸S E 04出土土器群²⁷⁾(第9図・第6表) 東大寺南大門から西へ約30mのところで検出された石組井戸で、枠内埋土の上層部分から多量の土器が出土した。出土土器には、土師器杯AⅡ・杯B・皿AⅠ・皿AⅡ・椀A・甕・罍釜、黒色土器A類皿B、黒色土器B類風字硯、須恵器杯・壺、緑釉陶器椀、灰釉陶器椀・皿がある。緑釉陶器は山城産蛇ノ目高台の椀と猿投窯K-14号窯式段階のものが、灰釉陶器には猿投窯K-90号窯式段階のものがあ。緑釉陶器だけがやや古い様相を残している。

土師器は、前述したS K 1623と比べて若干新しい要素も認められるものの、よく似た資料である。椀Aは口縁部の外傾度が開き気味になるため、形態的には杯Aとの区別が難しいが大きさにより区別できる。

⑫⑬⑭平城京東三坊大路東側溝S D 650B出土土器群²⁸⁾(第10図・第6表) 先述したS D 650Aよりも新しい時期の溝である。出土土器には、土師器、黒色土器、須恵器、緑釉陶器、灰釉陶器、白色土器、青磁がある。黒色土器は、まだA類が主体であるが、高台の付かない杯形から高台の付く椀形のものが中心になる。内面にはラセン状暗文が施されているものが多い。緑釉陶器は、少数の山城産の輪高台のものと猿投窯K-90号窯式段階のものが、灰釉陶器は猿投窯産とともに美濃産と見られるものも多い。猿投窯K-90号窯式段階のものが主体であり、美濃窯では同窯式に併行すると考えられている光ヶ丘1号窯式に属するものが中心である。



第9图 SK1623 SE04出土土器 (1/4)

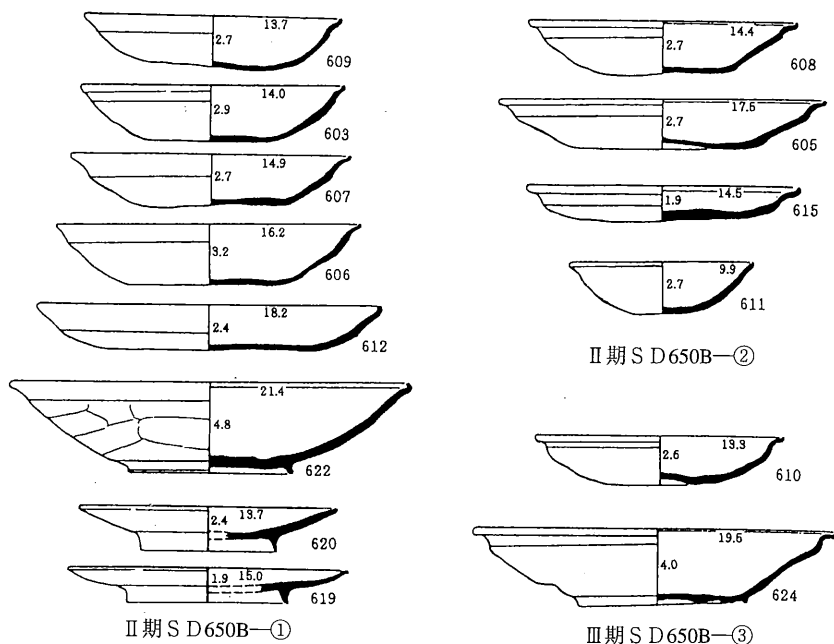


土師器の供膳形態を見る限りでは、S D 650 Bの中でもさらに型式を分けることができる一群がある。ここでは仮にS D 650 B-①及びS D 650 B-②、S D 650 B-③として記述しておく。

⑮ S D 650 B-①の土師器には、杯AⅡ(603・606・607・609)・杯BⅠ(622)・皿AⅠ(612)・皿B・皿C・椀AⅠ・高杯・甕・罍釜がある。杯Bを除く杯・皿・椀はすべてe手法である。杯AⅡとした603・609は、椀Aの系譜上で理解すべきと考えられる。杯Bは、口径の変化よりも器高の低下がみてとれる。これらは、S D 650 Bで主体をなす緑釉陶器・灰釉陶器と共伴する土師器であると判断している。

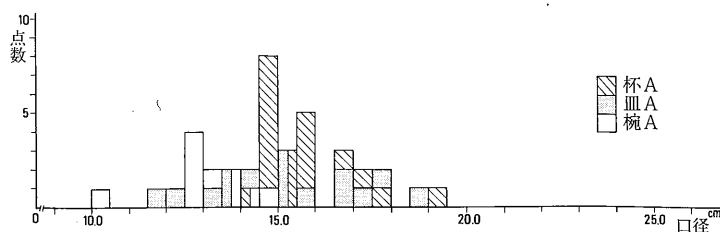
⑯ S D 650 B-②の土師器には、杯AⅠ(605)・杯AⅡ(608)・皿AⅡ(615)・椀AⅡ(611)がある。杯は、S D 650 B-①の土器群よりも口縁上半部を強く横なでするため、口縁部の外反が強くなっている。椀は、底部から口縁部下半にかけてやや丸みをおびた形態のものが現れる。①より1型式程度は新しく位置づけられるだろう。杯・皿・椀は、器高が低くなる傾向をしめす。これらの出土量は、相対的に少量であり、溝の埋没過程で混入した一群と見られる。

⑰ S D 650 B-③の土師器には、杯A(610)・杯B(624)がある。これらは、②よりさらに出土量は少ない。口縁部上端の横なでによる外反はより強いものとなっており、屈曲した形状を呈している。形態等の特徴から後述するⅢ期に属するものと考えられる。



第10図 SD650B出土土器 (1/4)

⑭大安寺旧境内（6BDA-60次調査）西太房 S K05出土土器²⁹⁾（第11図・第7表） 大安寺は延喜11年（917）に講堂三面と僧房を焼失しており、僧房周辺には所々に焼土層が堆積している。S K05は、この焼土層よりも下の遺構面で検出されている。S K05からは、土師器杯AⅠ・杯AⅡ・杯BⅠ・皿AⅠ・皿AⅡ・皿C・碗AⅠ・壺B・釜・甑・甕、黒色土器A類、黒色土器B類、須恵器、緑釉陶器、灰釉陶器、白磁、青磁が出土した。黒色土器は、円面硯を除く他はすべてA類である。杯が若干あるが碗形態のものがめだつ。緑釉陶器は、猿投窯K-90号窯式段階のものとはほぼ併行する山城産の削り出し輪高台のものがある。灰釉陶器は、猿投窯K-14号窯式段階



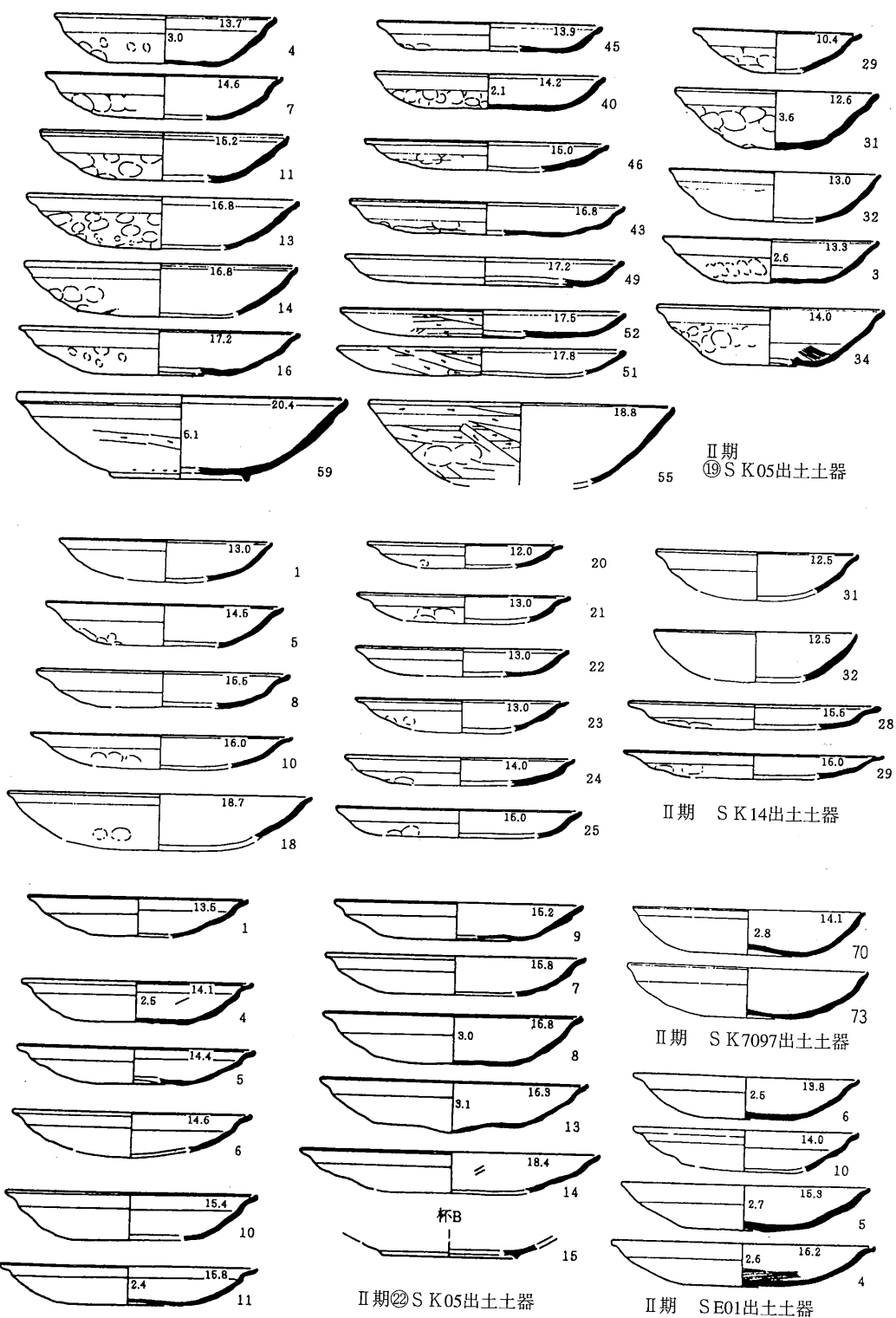
第7表 土師器口径分布 (SK05出土)

のものと猿投窯K-90号窯式段階のものがあるが、大半は猿投窯K-90号窯式段階である。

土師器杯Aの口縁端部は、大半のものが内側に小さく肥厚する形態である。皿Aの口縁端部も主流は杯Aと同じだが、皿AⅠには内側に大きく巻き込むものが見られる。調整は、杯・皿・碗ともe手法が中心だが、皿AⅠにはe-c手法が多いのが特徴である。杯AⅠ・皿AⅠの口径は、15.0～16.0cmが主体をなしており、皿Aには器高が2.0cmを越えるものがない。供膳形態のうち杯Bを除く殆どのものは器壁が2～3mmと薄く仕上げられている。杯Aの中には、口縁部の上半がさらに強く外反するものが存在している。これらは次の型式に相当する土器群の特徴に通じるものである。

⑮平城宮馬寮 S K7097出土土器³⁰⁾（第11図・第8表） 佐伯門の近くで検出された土坑S K7097からは、土師器杯AⅡ・碗AⅠ、黒色土器A類碗・鉢、須恵器甕が出土した。須恵器は奈良時代の甕片で、混入したものであろう。土師器杯・碗はe手法のみで、c手法はない。口縁部上半部は強く外反している。

⑯大安寺旧境内（6BDA-57次調査）苑院地区 S K14出土土器³¹⁾（第11図・第8表） 苑院地区で検出した土坑で、多量の瓦類と土師器杯AⅠ・杯AⅡ・皿AⅠ・皿AⅡ・皿C・碗AⅠ・高杯・甕、黒色土器A類碗・壺・甕、須恵器杯A・杯B・甕、緑釉陶器、灰釉陶器が出土した。緑釉陶器は山城産の碗が、灰釉陶器には猿投窯K-90号窯式段階の新相を示すものから同窯O-53号窯式段階に属する碗・皿がある。それぞれの器種の出土率は、土師器が全体の75.4%、黒色土器が6.2%、須恵器が15.9%、緑釉陶器が1.3%、灰釉陶器が1.1%を占めている。土師器は、前述した大安寺旧境内西太房 S K05出土の土器群と法量的には似ているが、S K14出土の土器群の方が口縁部が強く横なでされているため、外反度が強いものが多くっており、器壁も薄手化している。杯Aと碗Aの区別がさらに不明

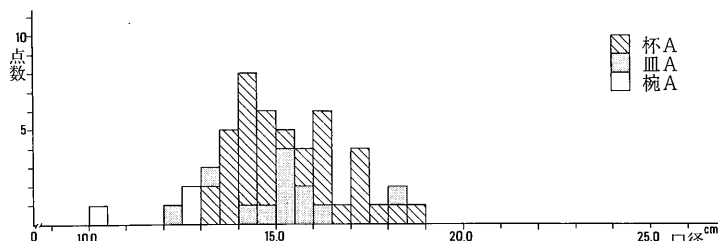


第11図 ①9SK05・SK14・②2SK05・SK7097・SE01出土土器 (1/4)

確になり、わずかに法量で区別できる程度である。形態的には、両者とも口縁部の開きが大きくなる一方、底部が相対的に小さくなる特徴をもつものが認められる。また、器高の差により浅いものと深いものの2群が見られるようになる。これらの特徴は、新しい方向を示す型式要素と考えられる。

㊸大安寺旧境内（第62次調査）大衆院地区S K05出土土器³²⁾（第11図・第8表） 大衆院地区の西端部で検出した土坑で、大半は攪乱で壊されていた。わずかに残った土坑の埋土から、土師器、黒色土器A類碗、須恵器が少量ではあるが出土した。出土率は、土師器が91.9%、黒色土器が3.9%、須恵器が4.3%を占めている。

土師器の供膳形態は、杯AⅠと杯AⅡが大半をしめ、僅かに杯Bが見られるが皿及び碗形態はない。杯AⅠは、大半が口径15.0cm大で、杯AⅡも13.5～14.6cmに集中している。器形や大きさが限定されて使われた可能性が考えられる。杯Aには器高により深浅が認められ、前述した史跡大安寺旧境内苑院地区S K14の土器群と共通する要素を持っている。調整は、すべてe手法になる。器壁は更に薄く、2mm程度しかないものが多くなる。



第8表 土師器口径分布 (SK7097・SK14・SK05・SD650B②・SE01出土)

㊹平城京左京六条三坊十五坪（第62次調査）S E01出土土器³³⁾（第11図・第8表） 十五坪は、東三坊大路を挟んで大安寺旧境内に西接している。井籠組井戸枠S E01の枠内埋土から土師器杯AⅠ・杯AⅡ・高杯・甕、黒色土器A類碗・甕、黒色土器B類碗、須恵器、灰釉陶器が出土した。黒色土器A類碗の体部内面にはラセン状の暗文が施されている。黒色土器B類碗の出土例としては、最も古い段階の資料である。灰釉陶器は、猿投窯K-90号窯式段階の碗と猿投窯O-53号窯式段階の皿がある。須恵器は杯B蓋が1点あるが、形態的な特徴からみて8世紀末～9世紀前半のものが混入したものと考えられる。

土師器杯Aは、口径13.8～16.2cmのものがあり器高は2.3～2.7cmと低い。薄い器壁に強い横なでだけで仕上げるため、形態に若干の歪みを持つものがめだってくる。

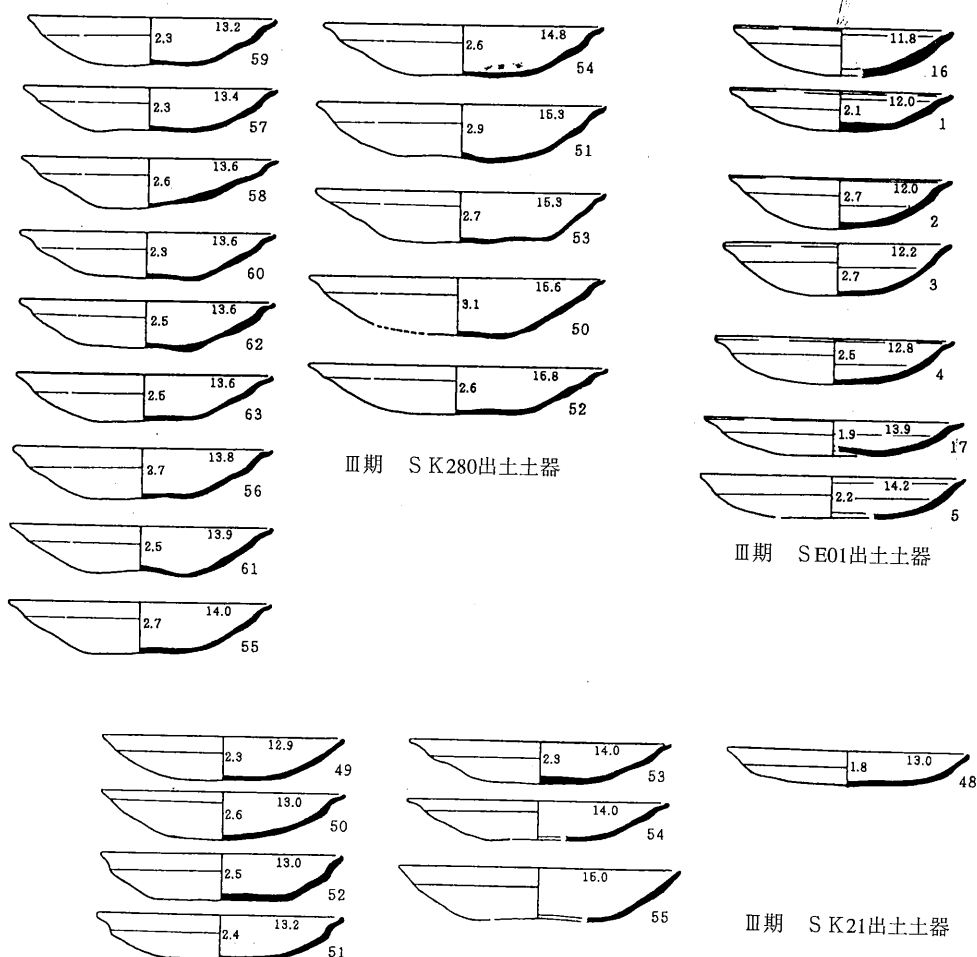
南都Ⅲ期 この時期に属するものは7例しかなく、Ⅱ期ほど資料量が充実していない。薬師寺西僧坊床面出土土器を基軸にしてその前後の土器群を検討する。

㊺西大寺旧境内S E280出土土器³⁴⁾（第12図・第9表） 横板組の方形井戸から出土した一群で、完形の土師器杯、灰釉陶器花瓶、奈良時代の高杯がある。

土師器杯AⅠ・杯AⅡは見られるものの、南都Ⅱ期で概述した大安寺旧境内大衆院地区

S K05出土土器群同様に、碗や皿が極端に減少する。杯の器高が低くなり、器高は3.0cmを越えるものが殆どない。調整はすべてe手法で、器壁も薄い。S K05の土器群と比べ、型式的に極めて近い関係にあると考えられるが、法量の縮小や底部から口縁部にかけての形態的特徴は、後述する土器群に通じる傾向を示すものが中心となっている。

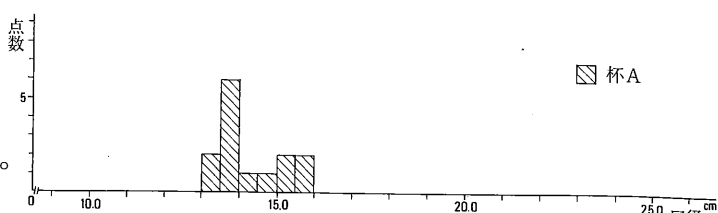
㊥平城京左京六条三坊十三坪（第56次）S K21出土土器³⁵⁾（第12図・第10表） 平面が不整形な土坑S K21の埋土から土師器杯・皿・甕、黒色土器A類碗・鉢、黒色土器B類碗、須恵器杯・碗・皿・壺・甕、灰釉陶器碗、緑釉陶器碗が出土した。黒色土器はB類も一定量出土しているが、A類が9割とまだ高い割合を占める。灰釉陶器には猿投窯O-53号窯式段階の碗がある。緑釉陶器は、深碗と皿があり、産地は近江か東海産か現状では特定し難い。土師器は、口径14.0cm以下の小型が多い。口縁部の外反度が著しいものが数点ある。底部が若干丸みをおびて、器壁がやや厚いものが含まれるようになる。



第12図 SK280・SE01・SK21出土土器 (1/4)

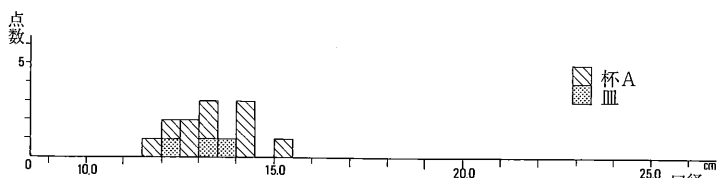
②平城京左京五条六坊十五・十六坪（第252次調査）S E 01出土土器³⁶⁾（第12図・第10表）元興寺旧境内に西接する遺跡で、平面不整円形の素掘りの井戸S E 01から出土した土器群で、土師器杯A・皿・甕・鍋、黒色土器A類碗・甕・鍔釜、黒色土器B類碗がある。黒色土器は、大半がA類でB類は2割程度である。土師器は、この頃になると一旦消滅したかのように見えた皿形態が再び現れる。

しかし、杯と皿を形態的に区別することが難しく、器高による深浅の差で判断できる程度である。これらの皿（1・5・17）



第9表 土師器口径分布 (SE280出土)

が奈良時代から型的に連続してきた皿Aの系譜上に位置づけることは今のところ難しい。Ⅲ期の皿は、「皿A」とせずに皿の器形名称だけにとどめ

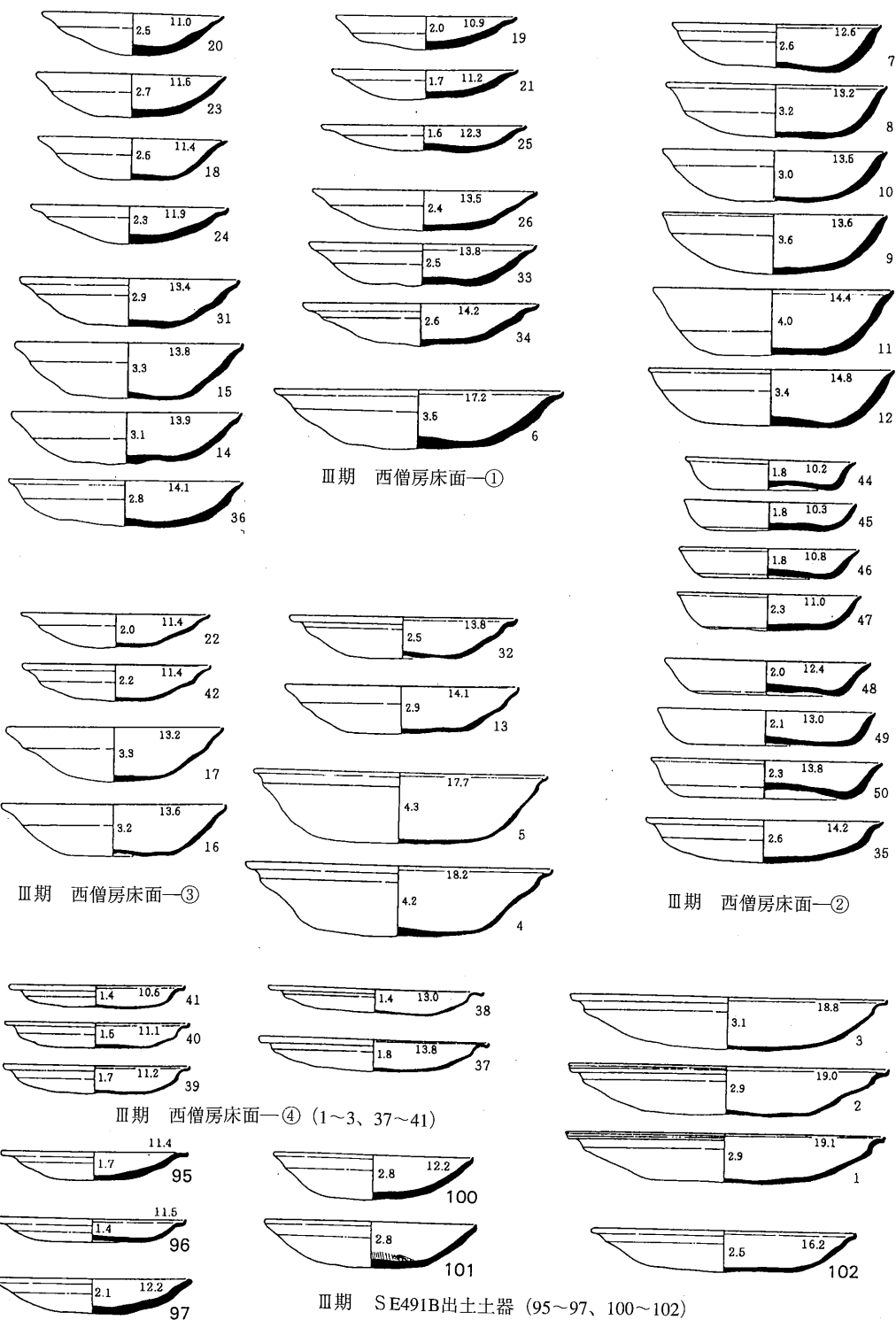


第10表 土師器口径分布 (SK21・SE01出土)

ておいた。杯AⅡの口径は11.8～12.8cmの範囲にあり、Ⅱ期の土器群と比べると確実に法量縮小している。器壁が厚くなるためか、底部から口縁部にかけての器壁の凹凸があるものは少ないが、外面のおさえ痕は明瞭に残るものが多い。

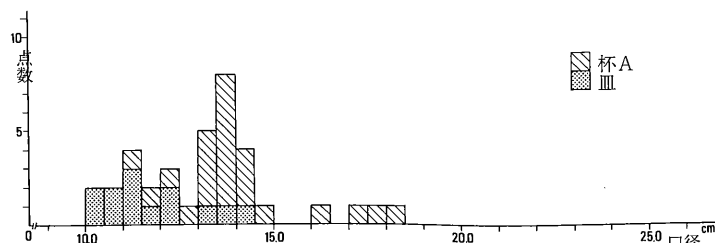
②西隆寺旧境内食堂推定地S E 491B出土土器³⁷⁾（第13図・第11表）造営当時に構築された井籠組の井戸S E 491Aを縦板組井戸枠に改修したものがS E 491Bである。枠内埋土から土師器杯A・皿・甕・鍔釜、黒色土器A類碗、黒色土器B類碗、灰釉陶器鉢、延喜通寶が出土した。黒色土器A類碗は、高台の径が小さくなりやや高いものが多くなる。口縁部内面のへら磨きや暗文が粗くなり、口縁部外面の磨きがないものが目立つ。外面に磨きが施されているものでも粗いものが殆どである。A類の調整の粗雑化に比べ、B類のものは内外面とも丁寧に磨かれているものが大半を占める。灰釉陶器鉢は、猿投窯O-53号窯式段階に併行するものと考えられる。土師器杯A（100・101）と皿（95・97）は、前述の土器群と同様に器高の深浅により区別することができる。杯102は、口径が16.2cmと大きく器壁も薄い。南都Ⅱ期の大安寺旧境内大衆院S K 05などの土器群に見られる特徴を備える。皿96は、口縁部の外反度が著しく、器壁も薄い。平安京からの搬入品であろう。

②薬師寺西僧坊床面出土土器群³⁸⁾（第13図・第11表）天禄四（973）年に大火にみまわれ西僧坊は焼失したが、後世に攪乱されることがなかったこともあり当時の状態のままで土器群が発見された。「床面出土土器は、実年代が判る基準資料として、また、当時の僧坊



第13図 薬師寺西僧房床面・SE491B出土土器 (1/4)

の生活を復元する資料として極めて重要³⁹⁾である。出土土器には、土師器杯・皿・椀・甕・鍔釜、黒色土器、白色土器、須恵器、緑釉



第11表 土師器口径分布 (薬師寺西僧房床面 SE491B出土)

陶器、灰釉陶器、青磁、白磁、奈良三彩がある。土器類の比率は、報告によると土師器が75.3%、黒色土器が15.4%、白色土器が2.5%、須恵器が1.8%、緑釉陶器が2.3%、灰釉陶器が1.6%、青・白磁が1.1%となる。黒色土器は大半のものがA類で、椀器形のものや高台がつく皿が多い。A類の高台皿は、土師器皿に高台をつけたものと同じ形態である。緑釉陶器および灰釉陶器には、猿投窯K-14号窯式段階から猿投窯O-53号窯式段階までがある。施釉陶器は、伝世していると考えられるものが多く含まれており、土師器などに比べてかなり広い時代幅を持っている。

本土器群の土師器杯・皿は、形態的な特徴から4つに分けることができる。

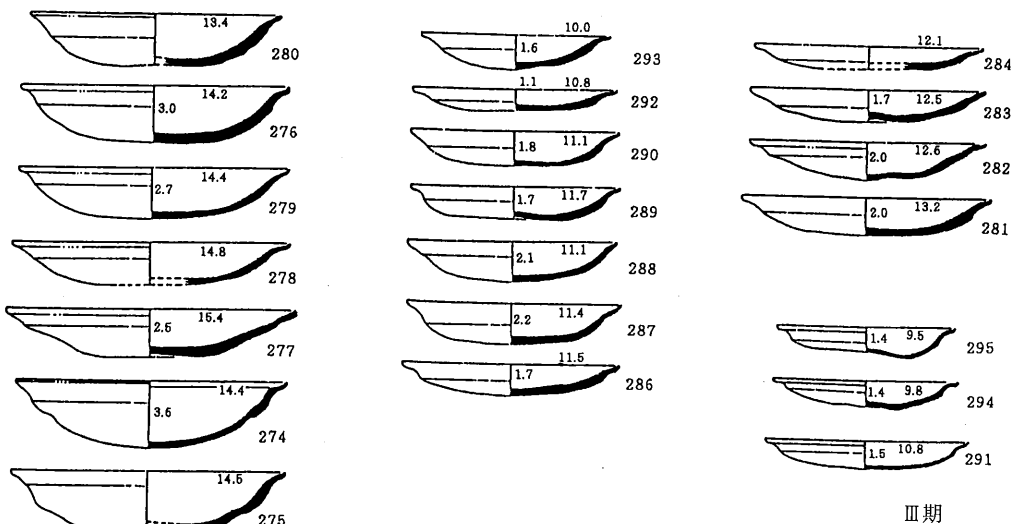
- ① 器壁が厚く、成形時の指頭圧痕を比較的明瞭に残す粗雑な仕上げの一群である。この形態のものは他の遺跡での出土例も多い。すべてe手法である。在地産土師器の供膳形態では、主体をなすものと考えられる。18・21・31・33・34・36などの他、14・15などや大振りの6などが、同タイプである。形態は、Ⅱ期の杯Aの変化の延長線上で理解できるが、Ⅱ期のものより口縁部の開きはやや大きくなっている。平底の底部が相対的に小さくなったものが主流で、小型のものでは丸底状を呈するものも多い。厚手化した底部と外反しながら立ち上がる口縁部からなり、口縁端部の器壁が薄くなる特徴的な形状である。口縁端部は、巻き込みぎみに上方へ向けておさめ、端部に小肥厚をもちその直下が極浅い凹みを呈するものが殆どである。この口縁端部の処理の仕方は、南都の土師器供膳形態の伝統的なものである。器高の差で杯と皿に区別できるが、形態的にはほとんど区別できない。
- ② ①とは形態的な特徴に若干の差異を指摘できるが、口縁端部以下は厚手となっており、基本形態や製作技法は共通する。指頭圧痕を残さない点なども加えて、①の形態のものを基盤にして丁寧につくられた一群と理解でき、同じ系譜上に位置づけられる在地産のものと考えられる。量量は、口径10.2~11.0cm、器高1.8~2.3cmの一群(44~47)と、12.4~14.2cm、器高2.0~2.6cmの一群(35・48~50)、口径12.6~14.8cm、器高2.6~4.0cmの一群(7~12)の3つに区分できる。後の二者は、①同様に器高差で皿と杯を区別できる。前者には、杯と考えられるものはこの資料では見られない。
- ③ 基本的に①のものと製作技法が同じで、形態的特徴も大きく変わらない。しかし、この時期の在地のものにしてはかなり器壁が薄く仕上げられており、仕上げも比較的丁寧で

ある。平安京の土器を意識して作られた可能性が指摘できる一群とみておく。22・42は口径11.4cm、器高2.0～2.2cm、13・16・17・32は、口径13.6～14.1cm、器高2.5～3.3cmである。4・5のように口径17.7～18.2cm、器高4.2～4.3cmと大振りで深い特異な器形のものもこの一群に位置づけられる。これらもすべてe手法である。

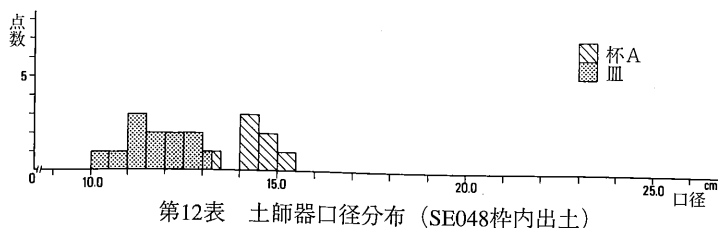
④ ①～③とは、大きな形態差なく製作技法も基本的には同じである。ただ、器壁が非常に薄く、口縁部の屈曲度合が異なり、口縁上端部は単に小さく丸く肥厚するだけではなく、つまみあげた形態をしている。微細な差異だが、これらの細部の違いは生産者集団の違いをあらわしていると考えられる。平安京の出土土師器のうちで、主体を占めるものに共通しており、平安京へ供給していた製作集団の製品として理解できるものである。

以上のように4つのタイプに分けたが、時間軸上での型式幅は、1型式におさまるものとして考えられる。

③薬師寺旧境内井戸S E048出土土器群⁴⁰⁾(第14図・第12表) 東僧房の北側で検出された縦板組井戸S E048の枠内から出土した一群である。土師器杯・皿・鋤釜、黒色土器A類碗、黒色土器B類碗、白色土器碗・皿、近江産緑釉陶器碗・皿がある。前述した西僧房床面出土の土器群で分類した①②④に当てはまるものがある。①には274・275・277・282～284・286・292が、②には276・278～281・287～290・293が、④には291・294・295が相当



第14図 SE048出土土器 (1/4)



第12表 土師器口径分布 (SE048枠内出土)

する。量的には、②のものが多く、口径の縮小も若干見られるが、器高が著しく低くなる。西僧房床面出土の土器群では、口径が小さいものでも器高の深浅により杯と皿が判断できたが、S E 048の土器群は口径12.6cm以下のものはどれも器高が低く、杯と判断できるものはない。調整は、すべてe手法である。西僧房床面出土土器群に比べて、より新しく位置づけられる要素が多く見られる。

以上、遺跡ごとに土師器の供膳形態のものを中心に土器群の様相を述べてきた。次の章では、Ⅰ～Ⅲ期ごとの土器群の全体的な特徴や変遷について触れる。

Ⅲ 各時期の特徴と変遷

(1) 南都Ⅰ期 Ⅰ期に属する土器群は、前章でも触れたように、c手法の盛行期のもので、形態的な特徴・調整手法や組成も奈良時代の後半期(平城宮土器Ⅳ・Ⅴ)の土器群の特徴と非常に良く似ている。Ⅰ期の土器群は、その前段階である奈良時代後半の土器群と型式的につながっていることは明かであり、大枠では同じ様式に属するものと考えられる。しかし、これらの中でも型式差として捉えられる土器群が幾つか存在しており、これらは古・中・新の3段階にわたり型式変遷していることが判る。型式変遷に伴い径高指数にも変化が認められるので、各器種ごとに表にしめしておいた。⁴¹⁾

南都Ⅰ期—古段階 南都Ⅰ期の特徴であるc手法化は、既に奈良時代後半から進行し、主要な位置を占めるようになっていっているので、平城宮土器Ⅳ・Ⅴ段階の土器群をⅠ期—古段階として認識するのが妥当と考えられるため、ここに位置づけておく。

南都Ⅰ期—中段階 この段階から平城京廃都後の土器群が展開し始める。①～⑤の土器群がこの段階のものである。まず、供膳形態の基本的な組成から見てみよう。

土師器は杯AⅠ・杯AⅡ・杯BⅠ・皿AⅠ・皿AⅡ・椀AⅠ・椀AⅡ、須恵器は杯A・杯Bである。この他に、①と④の土器群には黒色土器A類と緑釉単彩陶器が共伴している。新しい焼物が共伴する点で新相的な要素をもつと考えられるが、土師器の小型供膳形態では個体の変異幅を見込むと微細な型式差を時間軸上での前後に置くことは難しいため、同時期のものとして捉えた。ちなみにこの時期の黒色土器A類杯は、土師器杯Aと形態が近似しているのが特徴である。土師器の法量分布については、次のとおりである。

杯AⅠ:口径16.0～19.0cm、器高3.1～4.8cm 杯AⅡ:口径14.7～15.0cm、器高3.2～3.8cm

皿AⅠ:口径18.9～24.5cm、器高2.2～3.0cm 皿AⅡ:口径14.4～17.2cm、器高2.1～3.0cm

椀AⅠ:口径12.0～15.4cm、器高3.4～4.0cm 椀AⅡ:口径9.0～11.9cm、器高2.6～3.6cm

この段階で、杯Aに15.0cm大のものが出土する例が増加するようになる。ここでは、それらを包括した、相対的に小型の器形を杯AⅡとする。平城宮土器Ⅴの土器群と比べると、杯・皿類は、口径が著しく法量縮小する。椀Aは、口径の実数値にばらつきが見られま

まりがないものの、12.5～13.5cmのものが中心を占め、口縁部の形態も若干開いたようになる。口縁部の立ち上がりが開き気味になるのは、各器形を通じて見られる変化である。調整は、杯A・皿Aはb手法のものも少数認められるがc手法が盛行する。椀Aはc手法のものが主体だが、椀AⅡにはa手法で磨きを施すものが若干存在する。

南部Ⅰ期一新段階 c手法の盛行は継続しており、器壁が薄くなる傾向が認められる段階である。器高の低下が進み各器形とも口縁部の開きが明瞭になり、形態変化が進行する。⑥～⑩の土器群が相当する。供膳形態の基本組成は、土師器杯AⅠ・杯AⅡ・杯BⅠ・皿AⅠ・皿AⅡ、椀A、須恵器杯A・杯Bである。他に、⑥には山城産の緑釉陶器が、⑩には黒色土器A類及び緑釉陶器が共伴する。この段階で黒色土器A類杯が基本組成の1つになっていたと考えられるが、まとまった出土例が少なく明らかではない。⑥・⑩の土器群は、緑釉陶器が共伴したということで、新しい要素を持つと考えられがちであるが、土師器の供膳形態のものをみる限りでは両者間に型式的な差異を見いだすことが難しい。今後の出土量の増加を待って検討する必要がある。土師器の法量は、以下のとおりである。

杯AⅠ:口径17.5～19.5cm、器高3.3～4.2cm 杯AⅡ:口径13.8～16.9cm、器高3.0～4.2cm
皿AⅠ:口径18.2～21.1cm、器高1.7～3.0cm 皿AⅡ:口径14.8～17.4cm、器高1.9～2.7cm
椀AⅠ:口径12.3～14.8cm、器高3.1～4.0cm 椀AⅡ:口径 8.6cm 器高2.5cm

Ⅰ期—中段階と比べて、各器形とも口縁部の立ち上がりが大きく外方へ開くようになる。杯AⅠ、杯AⅡの口径縮小は明瞭に進んでないが、器高が若干低くなっている。口径14.5～15.0cmの杯AⅡは、口径の大きさが接近しているために椀Aとの区別が不明瞭になる。皿AⅠは口径の縮小が著しい。皿AⅡは、口径の中心が16.0cmから15.0cmへ移行している。器高も低くなり、口縁部が開いたようになる。椀AⅠは、口径がさらに大きくなり、中心が13.5～14.5cmへ移る。器高が若干低くなるため、椀も口縁部が少し開く。調整は、皿AⅡ・杯AⅡにe手法やf手法のものが少数認められるが、c手法が主体を占めている。杯B・杯蓋・椀AⅠには、削ったのち磨きを施すものが若干ある。

(2) 南部Ⅱ期 調整がc手法からe手法のものが中心となる。各器形をつうじて器壁が薄手になるなど、製作技術の変化が明瞭に認識できる時期である。また、この時期から黒色土器A類の他に、緑釉陶器や灰釉陶器が供膳形態に加わる例が増加する。Ⅱ期の範囲にある土器群にも、前期同様に型式変化をもつ土器群が認められ、古・中・新の3段階にわたって変化している。

南部Ⅱ期—古段階 c手法がまだ主体を占めるが、へら削り痕跡の間に、なでや指頭圧痕が露呈している個体が多くなっている。削りの粗略化とは逆方向とも見える器壁の薄手化も全体的な傾向を示す。⑪～⑮のものが属す。基本組成は、土師器杯AⅠ・杯AⅡ・杯

B・皿A I・皿A II・椀A I、黒色土器A類椀、須恵器杯A・杯Bである。この頃から須恵器の出土量が著しく減少する。黒色土器A類は、口縁部が内湾しながら立ち上がるものが増え椀形化の変化を示すようになるが、まだ高台の付かない杯形が中心である。この段階では、殆どの遺跡から出土するようになる。土師器の法量は以下のとおりである。

杯A I:口径17.1~21.0cm、器高2.8~4.2cm 杯A II:口径14.8~16.7cm、器高2.4~3.9cm

皿A I:口径17.3~21.2cm、器高1.8~2.9cm 皿A II:口径14.0~16.5cm、器高1.5~2.3cm

椀A I:口径12.3~14.2cm、器高2.3~4.0cm 椀A II:口径10.0cm 器高2.8cm

杯A I、杯A IIは小型のものに中心が移り、杯A IIは椀との区別がつきにくいものが増える。かろうじて椀Aと判断できるものは、径高指数が約22.0から25.0の範囲に入るものである。椀A Iの口径はⅡ期古段階で口径の中心が13.5cm前後となり、法量は器高を軸にして縮小方向へ転化する。皿A I、皿A IIの法量縮小は継続している。Ⅰ期とⅡ期の大きな違いは、調整ではⅠ期で盛行したc手法がまだ残っているものの、杯・皿・椀の口縁部の形態に変化が現れてくる。前段階までは、斜め上方に直線的に立ち上がる口縁部が主流を占めていたが、Ⅱ期ではやや内湾ぎみに立ち上がりながら、口縁部上半で外反する口縁部形態を呈するものを中心になる。e手法によって比較的薄い器壁に仕上げることができる技術の習熟度が高まったことが、c手法の粗略化を進める主な原因の1つとして理解できる。口縁部上半の外反傾向は器壁の薄手化に伴い横なでの押力による顕在化と考える。

南都Ⅱ期—中段階 南都では、この段階で小型のものを中心にe手法がほぼ主体となり、器壁の薄手化が更に進行する。⑯~⑲が属す。供膳形態の基本組成は、土師器杯A I・杯A II・皿A I・皿A II・椀A I・杯B、黒色土器A類杯・椀・皿、須恵器杯B、緑釉陶器椀・杯、灰釉陶器椀・皿である。Ⅰ期の段階で須恵器の出土量の減少化が始まっているが、Ⅱ期中段階では全体量の1割以下になる。黒色土器はA類が主体で、杯・椀・皿・甕・鉢など器種が多様化する。土師器の法量は、次のとおりである。

杯A I:口径16.1~19.1cm、器高2.8~3.2cm 杯A II:口径13.7~15.7cm、器高2.2~3.2cm

皿A I:口径16.8~18.6cm、器高1.7~2.4cm 皿A II:口径11.6~15.7cm、器高1.6~2.1cm

椀A I:口径12.6~14.6cm、器高2.9~3.7cm 椀A II:口径10.4cm 器高2.6cm

この段階で、杯A IとⅡの区別が非常に難しくなる。ただ、口径分布が14.0~15.5cm、16.0~17.4cmの2つに集中していることから、この範囲内でⅠとⅡとに分けられる。皿AはⅠ・Ⅱともに口径の縮小が著しい。皿A IIは、口径13.0cm以下の小型のものも認められるようになる。椀Aは、出土例が少なく詳細については明らかではないが、口径が14.0cmをこす大型のものは少なくなるようである。調整は、e手法が主体となったとはいえ杯B・皿A Iなどの大型の器形にはe-c手法のものがある。形態的な特徴では、杯や皿の口縁端部の巻き込みが小さいものが多くなるが、不明瞭で単に外反状を呈するだけのもの

も見られるようになる。しかし、c手法の皿AⅠは、口縁端部の内側の巻き込みが大きく奈良時代の形態を残すものが多い。薄い器壁が顕著となる中段階では、多くの器形で器壁が3mm程度しかないものが多くなる。①⑨の例は、南都Ⅱ期—中段階とⅡ期—新段階の中間的な位置を占めるものと考えられる。法量や組成などは中段階に、形態も中段階と考えられるものが中心をなすが、新段階の特徴を示すものも多く認められる。ここでは、過渡期のものとして位置づけておく。

南都Ⅱ期—新段階 e手法による器壁の薄手化が頂点を極める時期である。②⑩～②④のものが属す。新段階の供膳形態の基本組成は、土師器杯AⅠ、杯AⅡ、皿AⅠ、皿AⅡ、椀AⅠ、椀AⅡ、黒色土器A類椀、緑釉陶器、灰釉陶器である。須恵器は、殆ど使われなくなる。②②・②③の例のように、土師器杯AⅡを主体に限定的な使われ方をしているものもある。土師器の法量は、以下のとおり。

杯AⅠ:口径14.9～18.7cm、器高2.1～3.1cm 杯AⅡ:口径13.0～14.6cm、器高2.2～3.5cm

皿AⅠ:口径15.0～18.0cm、器高1.5～1.8cm 皿AⅡ:口径12.0～14.5cm、器高1.8～2.4cm

椀AⅠ:口径12.5cm 器高2.9～3.1cm 椀AⅡ:口径10.0cm 器高2.7cm

杯A・皿Aは、さらに法量縮小する。杯AⅠの口径の中心が15.0～16.5cmに、杯AⅡは13.5～14.5cmに、皿AⅡは13.0cm、皿AⅠは15.0～16.0cmになる。杯Aの同一口径のものの中に、器高の深浅があるものが顕著に見られるようになる。形態的な特徴としては、口縁部の屈曲がさらに強くなる。器壁の厚みが、更に薄くなったものが中心となっており、2mmぐらいの超薄型も多く見られるようになることや、椀器形のものが激減すること、皿Aの使用頻度が少なくなることもこの段階の大きな特徴である。

(3) 南都Ⅲ期 平安時代前半期の最後の土器群である。Ⅲ期の特徴は、土師器の供膳形態は全体的に小型のものが中心となり、調整はe手法のものが大勢を占める。前段階では器壁の薄さが際だっていたが、Ⅲ期では厚手化が進み、それと合まって外反度のゆるいものが中心となる。口縁端部は巻き込みふうにおさめており、上方へ小さく肥厚するものがまだ中心的である。土師器の器種構成にも変化が現れ、椀Aや皿Aの系譜上に位置づけられるものが殆ど見られなくなる。黒色土器B類椀を一定量伴う土器群が増える。黒色土器の主体はまだA類の椀であるが、B類椀はこの段階で供膳形態の基本組成として組み込まれるようになる。また、共伴する緑釉陶器や灰釉陶器にも変化が現れる。Ⅱ期にみられた山城産の緑釉陶器や猿投窯K-14号窯式およびK-90号窯式段階の緑釉陶器や灰釉陶器が姿を消す。それに変わり猿投窯O-53号窯式段階のものとこれに併行する他産地のものが主体を占めるようになる。Ⅲ期も、Ⅰ・Ⅱ期同様に型式差が認められ、古・中・新の3段階に分けることができる。

南都Ⅲ期—古段階 ②⑤～②⑦が属する。②⑤はⅢ期—古段階の古相をしめす。土師器杯の口径は若干縮小するが、器高はさほど変化しない。形態にⅢ期の特徴があらわれている。前段階のものと比べると、底部の広さが若干ではあるが小さくなる。小さな底部に大きく開いた口縁部が特徴的となる。小型のものは、底部が丸底状になり、口縁部との境が不明瞭になる。供膳形態の基本組成は、土師器杯AⅠ・杯AⅡ・皿、黒色土器A類・B類碗、緑釉陶器、灰釉陶器である。土師器の法量は、以下のとおりである。

杯AⅠ:口径15.0～15.9cm、器高2.1～3.1cm 杯AⅡ:口径11.8～14.8cm、器高1.8～2.7cm
皿Ⅰ:口径13.0～13.9cm、器高1.8～2.2cm 皿Ⅱ:口径12.0cm 器高2.1cm

杯は小型化がさらに進み、底部が丸みをおびてくる。杯AⅠは全体的に器高が低く径高指数値も低いものが多いが、杯AⅡの方は杯AⅠに比べて器高が若干高く、径高指数値が高いものが多い。Ⅲ期になると、奈良時代から継続的にあった皿Aが見られなくなる。代って杯形のものが浅くなり皿形化したものが現れる。Ⅱ期—新段階に比べ、明確な位置を占めるようになる。調整は、ほぼすべての器形がe手法である。器壁が厚手化し、底部外面の指おさえの痕跡も凹凸が目立たない比較的丁寧な作りのものと、痕跡を残すやや雑な仕上げの両者が存在している。

南都Ⅲ期—中段階 ここに属す資料も出土例が少ない。薬師寺西僧房床面直上の土器群が指標となるが、寺院特有の特殊な器種構成からなっているようである。②⑧～③⑩が属す。供膳形態の基本組成は、土師器杯AⅠ・杯AⅡ・杯・皿、黒色土器A・B類碗、白色土器、緑釉陶器、灰釉陶器である。土師器の法量は以下のとおり。

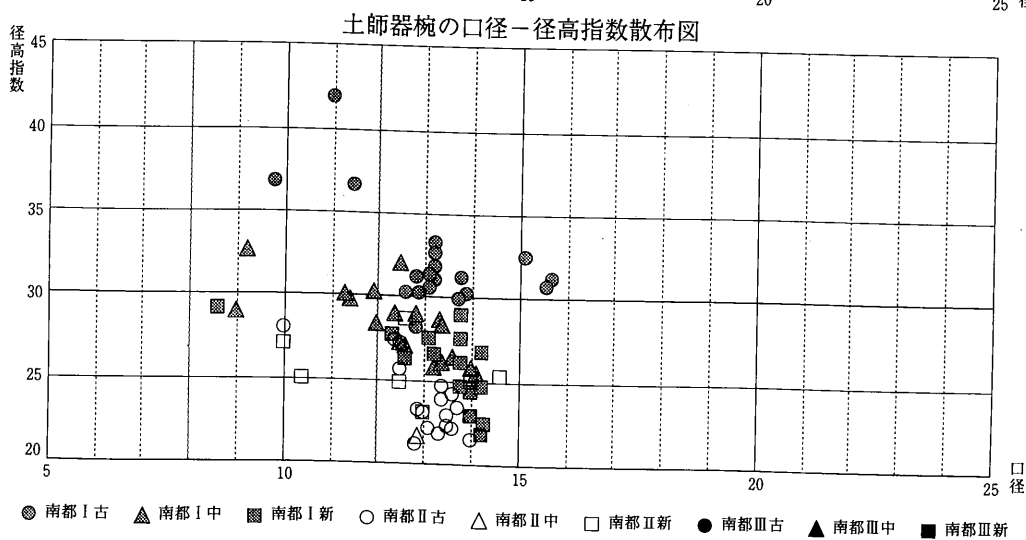
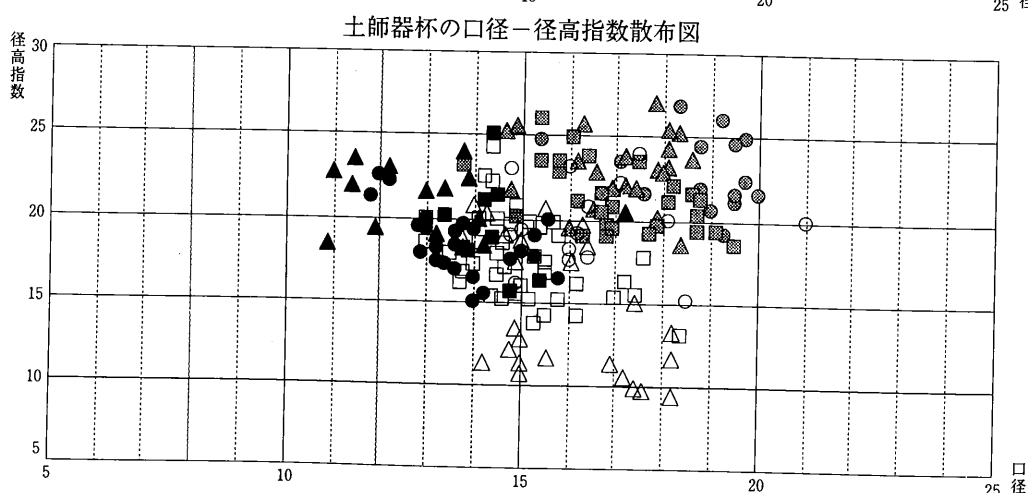
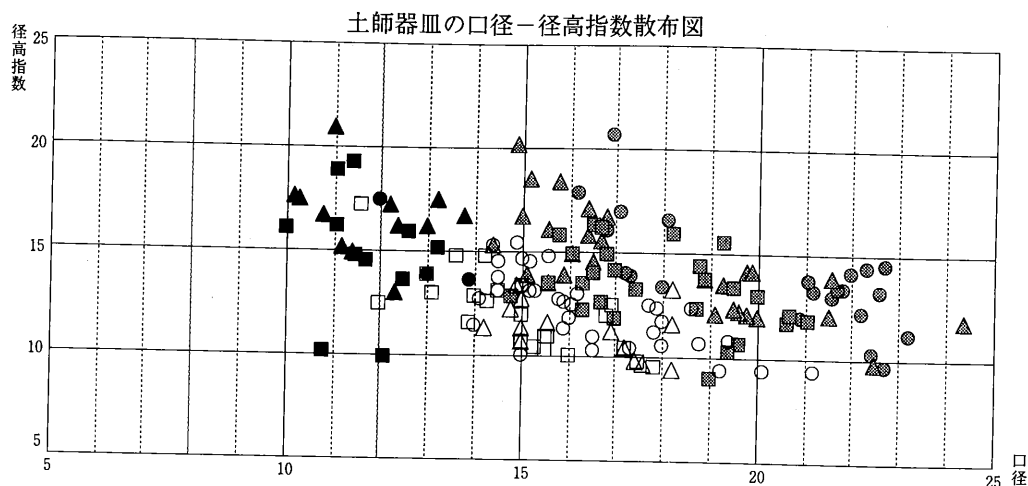
杯AⅠ:口径13.0～14.8cm、器高2.3～4.0cm 杯AⅡ:口径10.9～12.6cm、器高2.0～2.8cm
皿Ⅰ:口径13.0～14.2cm、器高2.1～2.6cm 皿Ⅱ:口径10.2～12.4cm、器高1.4～2.5cm

土師器杯は4つのグループに分けられるが、前項で触れたように①の土器群が直接杯Aの系譜をひくと思われる。杯Aの法量は、さらに縮小を続けてはいるものの、口径の大きさによりⅠ・Ⅱに分けることができる。皿も同様に、杯AⅠ・Ⅱの大きさに対応するものがある。これらが土師器供膳形態の基本組成になる。この段階から杯Aの系譜とは異なる杯が見られる。

南都Ⅲ期—新段階 平安時代前半期の最終段階である。この時期のものには、現在のところ③⑪の土器群しかない。基本組成は、土師器杯A・皿、黒色土器A・B類碗、白色土器、緑釉陶器である。土師器の法量は、以下のとおり。

杯A:口径13.4～15.4cm、器高2.5～3.6cm
皿Ⅰ:口径10.8～13.2cm、器高1.1～2.2cm 皿Ⅱ:口径10.0cm、器高1.6cm

調整は、前段階と同じくe手法である。Ⅲ期—中段階に比べ大きな形態変化はないが、器高がさらに浅く、皿形化する。法量縮小も緩やかだが進行していることが判る。



第15図 土師器小型供膳形態径高指数散布図

Ⅳ 土器型式の年代と平安京出土土器群との関連

ここでは、先ず概述してきた土器群が占める年代的な位置関係について考えてみたい。そしてその後に、平安京出土土器群との関連を考えてみる。

年代 各土器群の時間的な変遷は、第14表でしめした。この根拠となるのは、冒頭で述べたように、土師器の供膳形態の型式差によるものである。

大きくⅠ～Ⅲ期に分けることから始まり、さらに各時期を古・中・新の3段階に細分することが可能であった。年代については、それぞれの土器群に詳細な実年代を与えることはできないが、幾つか手がかりになり得るものがあるので、それを根拠にして前後の型式についても考えてみる。

南都の土器群は平安京遷都後から始まるわけではなく、奈良時代から連綿とつながっていることは明白である。ここで南都Ⅰ期とした段階の古段階にあたる土器群は、平城宮土器編年のⅣ・Ⅴ期に想定しているので概ね760年前後から780年代の年代幅が与えられる。Ⅰ期中段階は実年代を推定するのは難しいが、この時期のものは平安京北野廃寺S D 8の土器群と法量的に非常に近似しており、平安京土器編年による平安京Ⅰ期中段階（780～810年頃）とはほぼ併行関係にあると考えられる。

Ⅰ期—新段階の年代の手がかりとしては、平城宮S E 311 Bの土器群がある。井戸枠内からは「隆平永宝」が1点出土しているので、初鑄年代（796年）以降のものであることが判る。さらに、奈良国立文化財研究所の発掘調査成果より、この井戸は平城上皇崩御（825年）のあとの遺構と考えられているのでⅠ期新段階の中心は820年代に推定できる。

Ⅱ期古段階は、東堀河S D 017から「承和昌宝」（835年初鑄）が出土しているのでそれ以降であることは理解できる。中段階になると、文献史料に記載された大火による焼失年代で推定できる。大安寺旧境内の60次調査で検出したS K 05は、僧房が延喜11年（917）の大火にみまわれる以前に廃棄された土器であることが発掘調査によって検証されている。

Ⅱ期新～Ⅲ期古段階のものは、直接実年代を知る手がかりとなるものが少ないが、Ⅲ期中段階では、薬師寺西僧房の床面出土土器がある。出土状態から見ても、天禄四年（973）の大火直前まで使用されていた土器群と判断できる。これらの土器型式がもつ年代は、960年から973年を中心として若干の時間幅をもつものと考えている。

実年代が不明確な時期については、平城京および長岡京・平安京との関わりを考慮して位置づける必要があると考えられるので、以下にその点について記す。

南都の土師器は、これまで見てきたように長岡京・平安京の土師器の様相と非常に似ていることが指摘できる。南都Ⅰ・Ⅱ期段階では、形態的な特徴や法量などは差異を見いだすことが難しい。ただ、調整手法や椀A・皿Aの消長に関しては、南都独自の方向を辿る

ようである。伝統的なc手法や皿AⅠが9世紀後半に入ってもまだ見られたり、深手の椀器形が存在するのは、平安京と異なる点である。平安京の土器編年のⅡ期古段階と南都Ⅱ期古段階の土器を比べると、平安京では既にe手法が主流となり杯・皿が製作されているが、南都ではまだc手法で作られている。手法だけに捕らわれて、両者を比べると明らかに平安京の土器群のほうが新しい時期のものとして編年されてしまいがちであるが、形態的な特徴や法量、共伴遺物などを考慮すると同時期のものとして考えるのが妥当であろう。南都Ⅱ期中段階でようやくe手法化が進むが、平安京よりも遅れたものの、e手法だけで薄く作り上げる技術は平安京と足並みを揃えている。

では、土師器以外の土器類はどうであろうか。黒色土器A類は、平安京よりも若干先行して普及が進むようである。須恵器は、平城京遷都後から出土率の低下が見られるが、Ⅱ期—古段階になるとさらに減少傾向が著しくなる。緑釉陶器や灰釉陶器は、Ⅰ期—新段階で現れ、Ⅱ期—古段階で増加するようになる。このように南都は、Ⅰ期—新段階あたりからⅡ期段階にかけて土器組成に変化が見られるようになり、土器様式の大きな画期として捉えることができよう。この現象は、平安京においても見られる。「Ⅰ期新からⅡ期古にかけては土器様相の構造的な変化期」で、さらに「律令的土器様式の終焉期であり、平安京を主要な舞台として新たに成立する土器様式の台頭期」であると指摘されている。⁴²⁾南都Ⅰ・Ⅱ期の土器群は、平安京Ⅰ・Ⅱ期の変遷と大きくずれることなく連動して変化している可能性が大きく、時間的にも大差はないものとして考えられる。

しかし、Ⅲ期になると平安京の土器群との差異が認められるようになる。薬師寺西僧房床面出土土師器の中には、平安京の土器を意識して作られた一群が存在しているが、それ以外の土師器は厚手化が進み、平安京との違いがはっきり見えてくるようになる。また、土師器だけでなく、黒色土器や施釉陶器の占める割合にも違いが認められる。この時期になると、黒色土器の出土率が高く、緑釉陶器や灰釉陶器は出土率が著しく減少する。この状況は、平安京と大きく異なる点として指摘できる。南都は、Ⅲ期以降、土師器と黒色土器を基軸とした在地的土器様相がより強くなるようである。

以上見てきたように、南都の土師器は、平安時代になってから急に出現したわけではなく、都城に成立した土師器と型的につながつていることが理解できる。また、長岡京・平安京で主体をなす土師器も平城京のものと同じ系譜上にあることも指摘できよう。

要するに、都城で成立した土師器は、平城京—長岡京—平安京へと型的つながりをもって変化したものと考えられ、その端緒は藤原京期にまで遡る可能性も十分に考えられよう。しかし、南都の土師器は、「都城形」ともいえる土師器の系譜を直接ひいてはいるものの、平安時代前半期も終わりに近づくと両者間の差異が明確になり始め、徐々に在地型の方向へ姿を変えていくのである。

なお、Ⅰ期からⅢ期の各段階の土師器供膳形態と共伴する他の土器類については、主要なものの変遷を第16図～第21図にしめた⁴³⁾。資料数の多少があり、すべての種類と器形でその消長や変遷を把握することは、現段階では難しいが、須恵器、黒色土器、緑釉陶器、灰釉陶器など資料数が比較的多い資料では、型式変遷の流れの概要はほぼ認識することができる。これらのことについては、別稿で改めたい。

V まとめにかえて

以上、南都における平安時代前半期の土器編年を試みてきた。資料不足の箇所も認められるが、土器群の型式変遷の様相を概ね示し得たものと考えている。

本稿では、土師器の供膳形態のものを軸にして型式変遷を検討してきた。冒頭でも述べたが、土師器は、本稿で対象とした時代を含めてその前後の時代にも渡って普遍的に出土する資料である。このことは、土器群の型式変遷を考えていく上で重要な意味をもつものと考えられる。少なくとも、平城京の時代から近世までは変遷を辿れるものと考えている。土器の年代を知ることは、遺跡や遺構を理解していく上で必要不可欠なことであることはいうまでもないことであり、今回試みた編年に関しても資料の増加によってさらに認識を深め、より詳細な土器編年をめざしたいと考えている。

最後になったが、本稿をまとめるにあたっては、京都市埋蔵文化財研究所 小森俊寛、上村憲章、平尾政幸の各氏および、奈良市教育委員会文化財課課長 安田龍太郎をはじめとする同課職員諸氏の多大なる御助言、御協力を賜った。記して感謝いたします。

注

- 1) 「南都」の呼称の初出については明らかではないが、平安時代後期には既に使われている。ここでは、平安京を北都または北京というのに対し、平城京跡が南都と称されたという意味に理解して使用した。よって、本論でさす南都の地域とは、概ね旧平城京域内を想定している。
- 2) 田中 琢「Ⅴ A、S E 311・272出土の遺物とその年代」『平城宮発掘調査報告Ⅳ』奈良国立文化財研究所学報17冊1965奈良国立文化財研究所、巽 淳一郎「第Ⅴ章 3 土器」『平城宮発掘調査報告Ⅱ』奈良国立文化財学報第42冊1985奈良国立文化財研究所
- 3) 『都城の土器集成Ⅱ・Ⅲ 古代の土器2・3』1993・1994古代の土器研究会
- 4) 土師器の小型供膳形態を編年の基軸として見る考え方は、京都市埋蔵文化財研究所 平尾政幸、小森俊寛の両氏らが平安京土器編年の際に提唱されている。
- 5) 土器の器形名称や調整手法、胎土の用語については、奈良国立文化財研究所の刊行

物に準拠している。本書に掲載した土器番号は既報告番号である。灰釉陶器の型式変遷は、
 植崎彰一「灰釉陶器の編年について」『愛知県古窯跡群分布調査報告Ⅲ』1983を参考にした。

6) 『奈良市埋蔵文化財調査概要報告書 平成5年度』1994 奈良市教育委員会

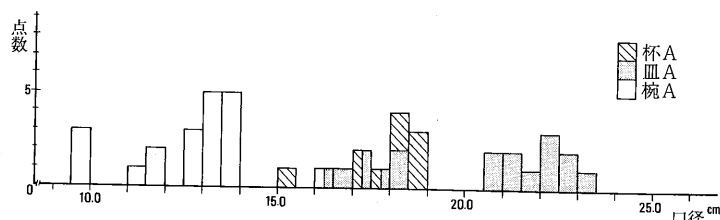
7) 緑釉単彩陶器の用語は、京都市埋蔵文化財研究所 平尾政幸氏が提唱したものである。
 緑釉単彩陶器と9世紀以降に出現する緑釉陶器は、器形とその組成、製作技術や生産
 体制にまでも違いが認められる。緑釉の単彩陶器という点においては同じであるが、型式
 的につながるものではない。緑釉単彩陶器が意味不明な用語であると指摘する研究者もい
 るが、2つの焼物を区別するという意味において使用するのは何ら問題はなく、むしろ同
 一名称で扱うことの方が不適当と考えられる。

8) 平城宮土器Ⅴの

代表例としては、平城
 宮内裏北外郭地区で検
 出したSK2113、馬寮
 域で検出したSE6166

・SK7097、平城京東

市跡推定地で検出したSE200などの土器群がある。土器群の比較資料データとして、
 口径分布表を挙げておく。



第13表 土師器口径分布 (SK2113・SE6166・SK7909・SE200出土)

9) 『奈良市埋蔵文化財調査報告書 昭和54年度』1980 奈良市教育委員会

10) 『平城宮発掘調査報告Ⅱ』奈良国立文化財研究所学報第15冊1962 奈良国立文化財研究所

11) 『奈良市埋蔵文化財調査概要報告書 昭和62年度』1987 奈良市教育委員会

12) 注6文献

13) 『平城宮発掘調査報告Ⅺ』奈良国立文化財研究所三十周年記念学報第40冊1981 奈良国立文化財研究所

14) ここで使用したf手法とは、横なで痕跡が口縁部外面下端付近にまで及んでいるもの
 のを言う。横なでによる外面調整技法という面では、a・e手法と基本的には差異はない。

15) 『平城宮発掘調査報告』奈良国立文化財研究所学報第50冊1991 奈良国立文化財研究所

16・17) 注15文献

18) 注10文献

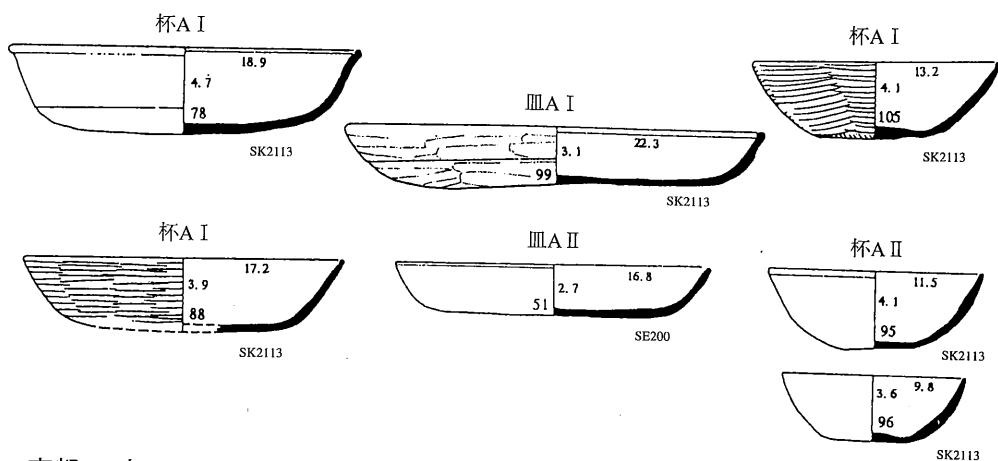
19) 河内産の土師器杯・皿類には、9世紀になってもへら磨きと暗文が施されている一
 群がある。最近の調査研究により、河内産の杯・皿類は口縁部の形態や調整手法に特徴が
 あり、大和産と考えられる土師器とは識別できることが可能になってきている。このことに

については、京都市埋蔵文化財研究所 小森俊寛氏が第67回古代の土器研究会で「都城出土の河内産の可能性のある土師器」と題して発表されている。

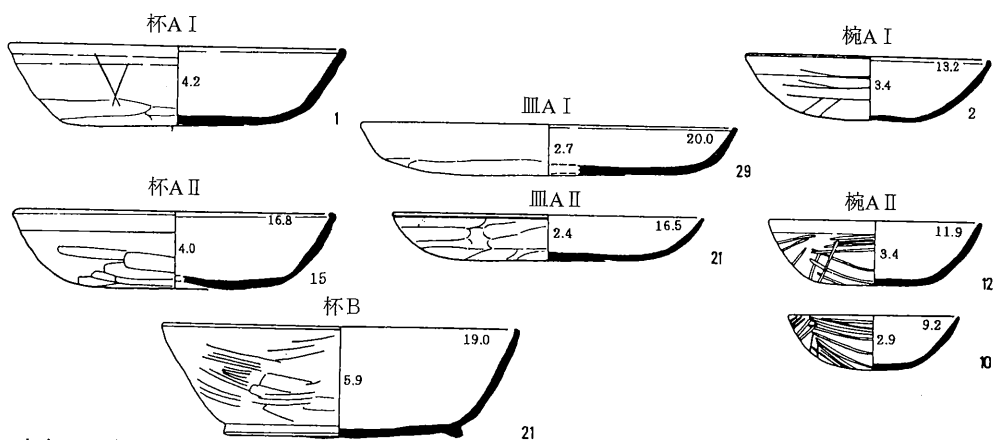
- 20) 『奈良市埋蔵文化財調査概要報告書 平成6年度』1995 奈良市教育委員会
- 21) 『奈良市埋蔵文化財調査概要報告書 平成元年度』1989 奈良市教育委員会
- 22) 『平城京東市跡推定地の調査Ⅱ－第4次発掘調査概報－』1986 奈良市教育委員会
- 23) 注6文献
- 24) 『平城宮発掘調査報告Ⅵ』奈良国立文化財研究所学報第23冊1974 奈良国立文化財研究所
- 25) 注24文献
- 26) 『平城宮発掘調査報告ⅩⅡ』奈良国立文化財研究所学報第42冊1985 奈良国立文化財研究所
- 27) 『昭和54年度平城宮跡発掘調査部発掘調査概報』1980 奈良国立文化財研究所
- 28) 注24文献
- 29) 注6文献
- 30・31) 注26文献
- 32) 注6文献
- 33) 『奈良市埋蔵文化財調査概要報告 昭和58年度』1984 奈良市教育委員会
- 34) 『西大寺防災施設工事・発掘調査報告書』1990 奈良国立文化財研究所
- 35) 注33文献
- 36) 『奈良市埋蔵文化財調査概要報告書 平成4年度』1993 奈良市教育委員会
- 37) 『西隆寺発掘調査報告書』1993 奈良国立文化財研究所
- 38) 『薬師寺発掘調査報告』奈良国立文化財研究所学報第45冊1987 奈良国立文化財研究所
- 39・40) 注38文献
- 41) 本稿で作製した径高指数表は、各個体を口径の大きさ別で観察した時に、口径と器高がどのような比率で現れるのかに注目した。
- 42) 小森俊寛「概要」『都城の土器集成Ⅱ 古代の土器2』1993 古代の土器研究会
- 43) 図中では、法量と土器番号、本書で使用了土器群番号を示した。また、必要に応じて今回扱った土器以外のものも提示したので、これに関しては遺構名を記述しておいた。

年代	南都編年	遺 跡	平城宮土器編年	異編年	平安京編年
— 800	南	古段階 ・平城宮SK219 ・平城宮SK2113・平城京東市跡推定地SE200 ・平城宮SK6166	平城宮土器Ⅳ 平城宮土器Ⅴ		750頃 平安京Ⅰ期—古
	都	中段階 ①平城京右京二条三坊四坪S E 503 掘形 ②平城京左京五条二坊十四坪S E 03 ③平城宮北方官衙地域S B 116 ④史跡大安寺旧境内苑院推定地S D 03 ⑤平城京右京二条三坊四坪S E 503 枠内	平城宮土器Ⅵ		平安京Ⅰ期—中
	I 期	新段階 ⑥平城宮内裏殿舎地区S B 8224 ⑦平城宮内裏内郭東垣S A 248 ⑧平城宮内裏外郭東面築地回廊S C 156 ⑨平城宮内裏S A 4760 ⑩平城宮北方官衙地域S E 311B	平城宮土器Ⅶ古 平城宮土器Ⅶ		平安京Ⅰ期—新 — 840頃
— 900	南	古段階 ⑪平城京左京一条四坊五坪S D 02 ⑫平城京左京二条四坊十一坪S E 55 ⑬平城京左京八条三坊東堀河S D 017上層 ⑭史跡大安寺旧境内西太房S K 04 ⑮平城京東三坊大路S D 650A		S D 650A	平安京Ⅱ期—古
	都	中段階 ⑯平城宮玉手門S K 1623 ⑰東大寺西南院S E 04 ⑱平城京東三坊大路S D 650B① ⑲史跡大安寺旧境内西太房S K 05		S D 650B	平安京Ⅱ期—中
	II 期	新段階 ⑳平城宮馬寮S K 7097 ㉑史跡大安寺旧境内苑院地区S K 14 ㉒史跡大安寺旧境大衆院地区S K 05 ㉓平城京東三坊大路S D 650B② ㉔平城京左京六条三坊十五坪S E 01 ㉕		続 S D 650B	平安京Ⅱ期—新 — 930頃
— 1000	南	古段階 ㉖西大寺旧境内S E 280 ㉗平城京左京六条三坊十三坪S K 21 ㉘平城京左京五条六坊十五坪・十六坪S E 01			平安京Ⅲ期—古
	都	中段階 ㉙西隆寺旧境内食堂推定地S E 491B ㉚薬師寺旧境内西僧房床面 ㉛平城京東三坊大路S D 650B③		薬師寺 西僧房	平安京Ⅲ期—中
	III 期	新段階 ㉜薬師寺旧境内S E 048		続薬師寺 西僧房	平安京Ⅲ期—新

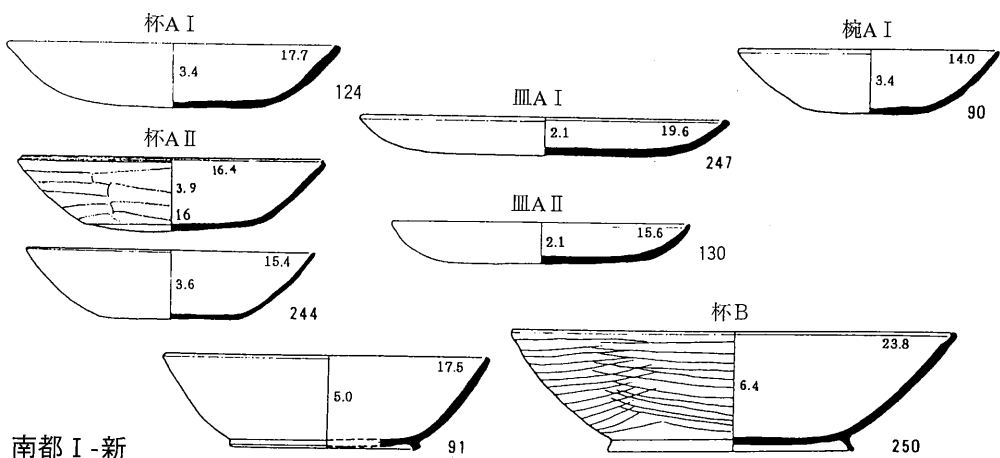
第14表 土器群編年表



南都 I - 古

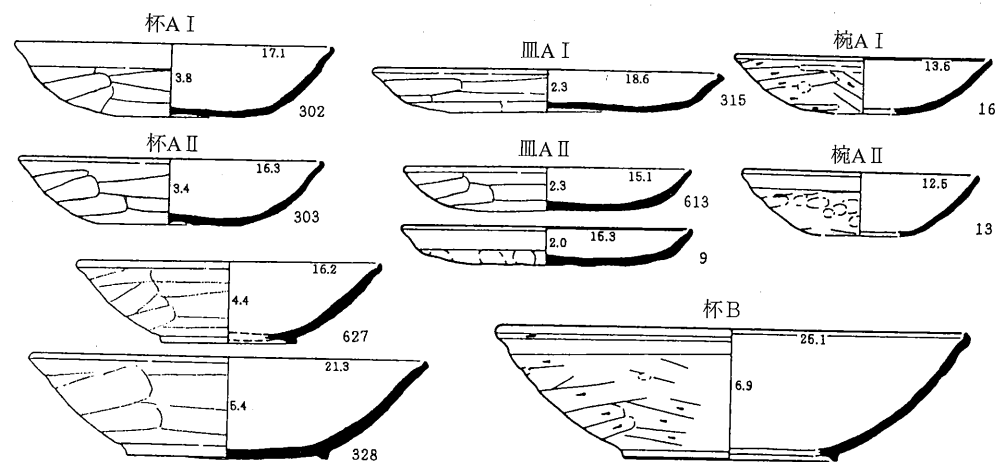


南都 I - 中

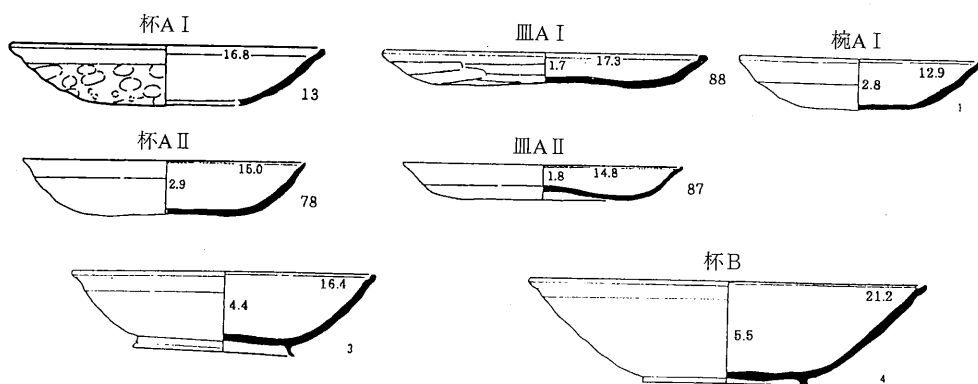


南都 I - 新

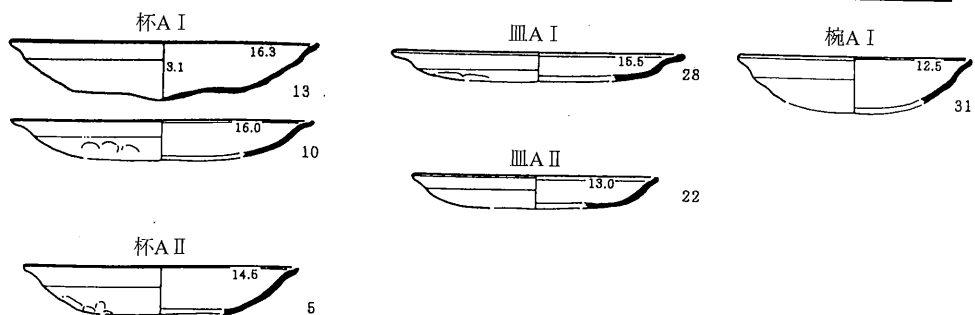
第16図 南都 I 期



南都Ⅱ-古

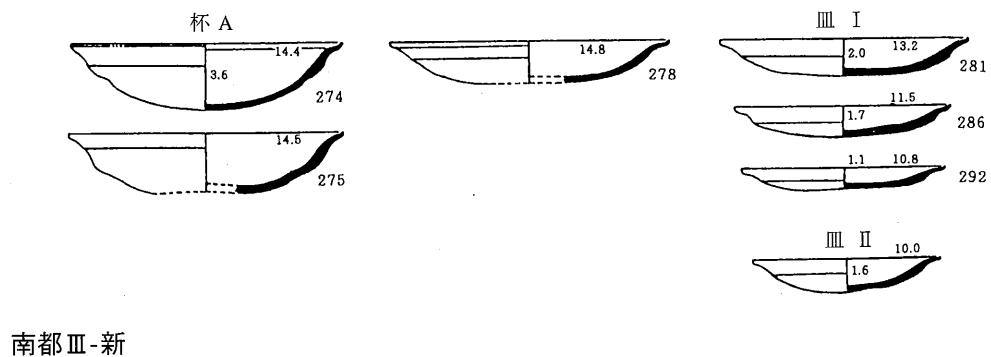
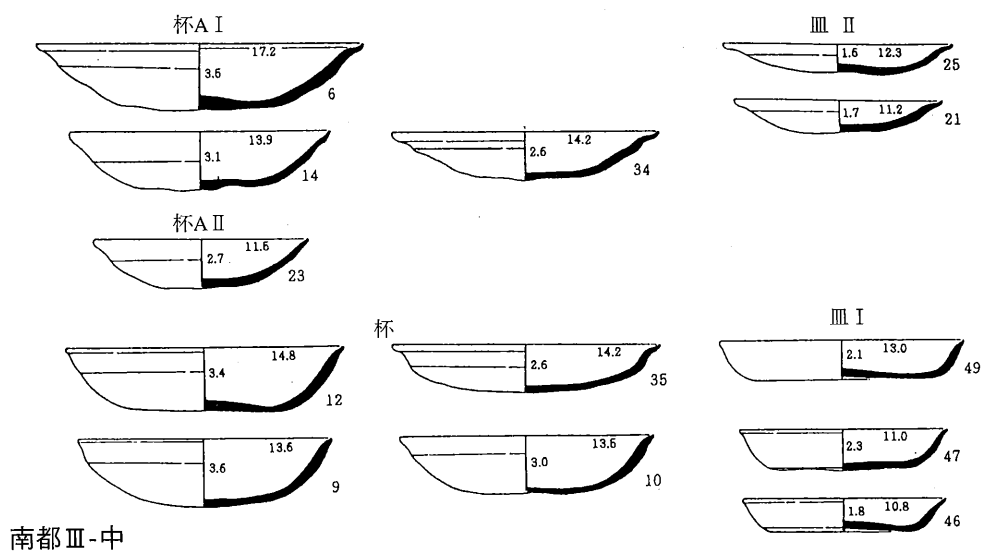
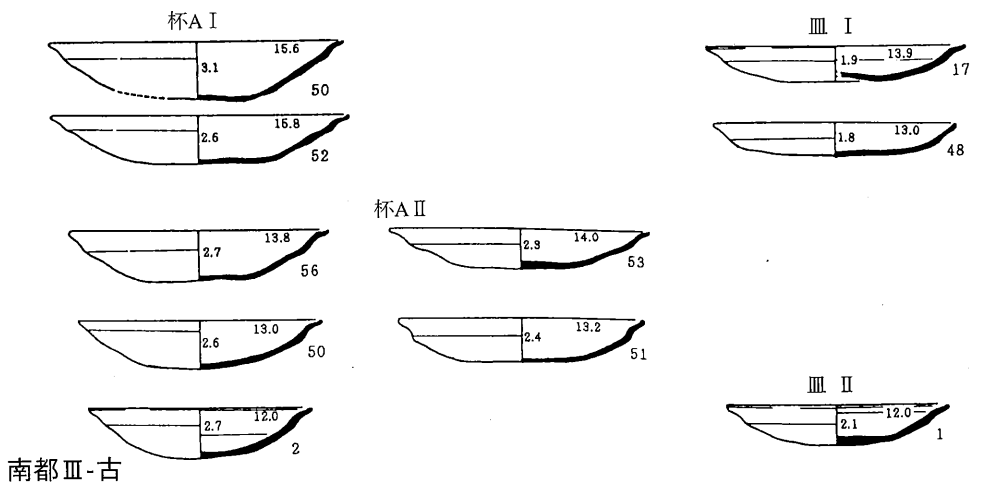


南都Ⅱ-中

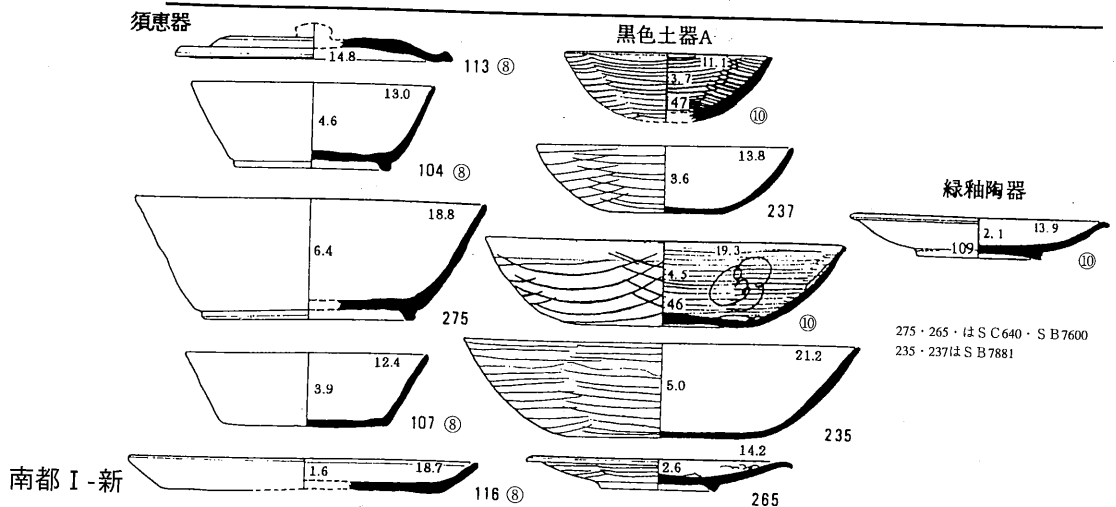
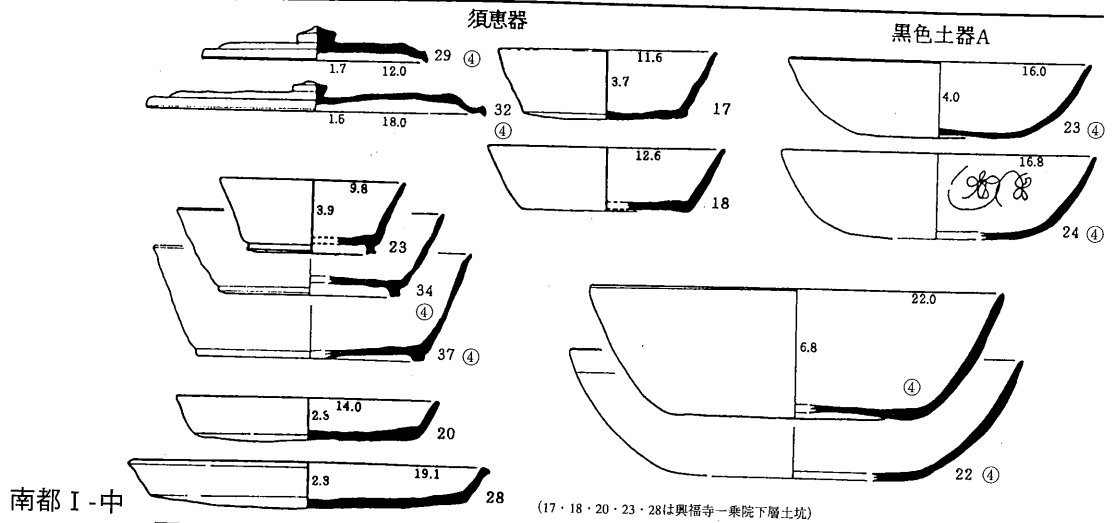
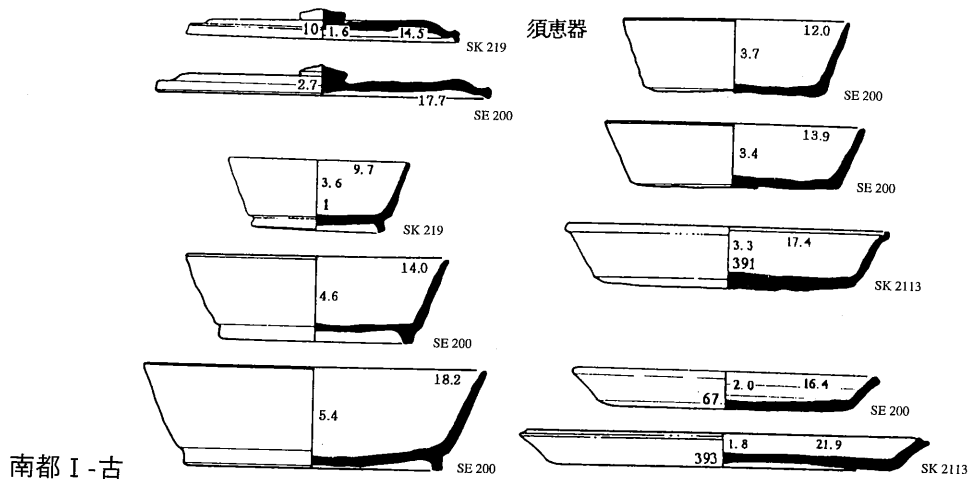


南都Ⅱ-新

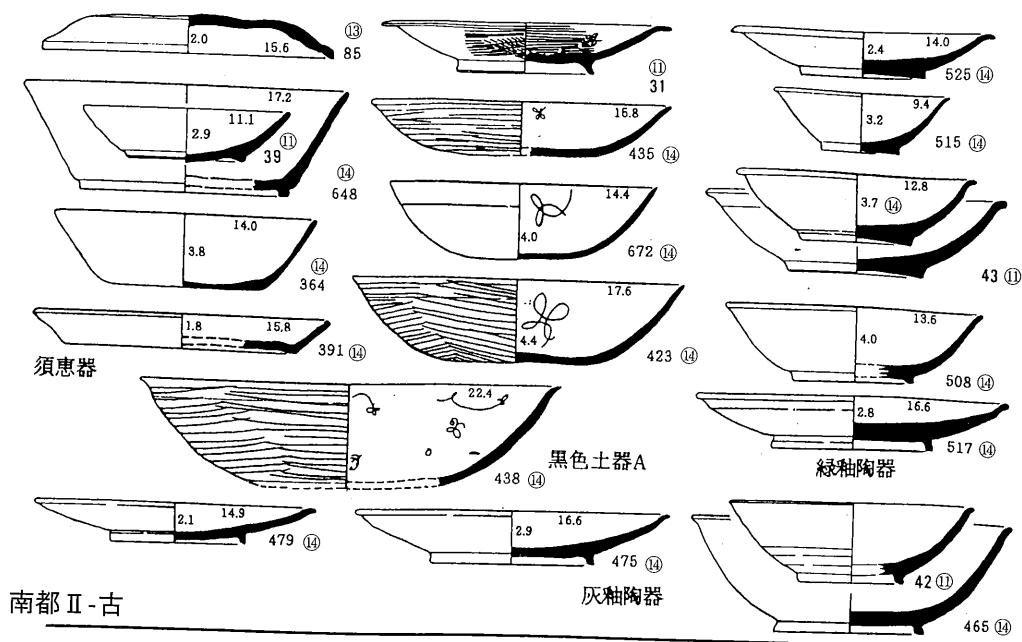
第17图 南都Ⅱ期



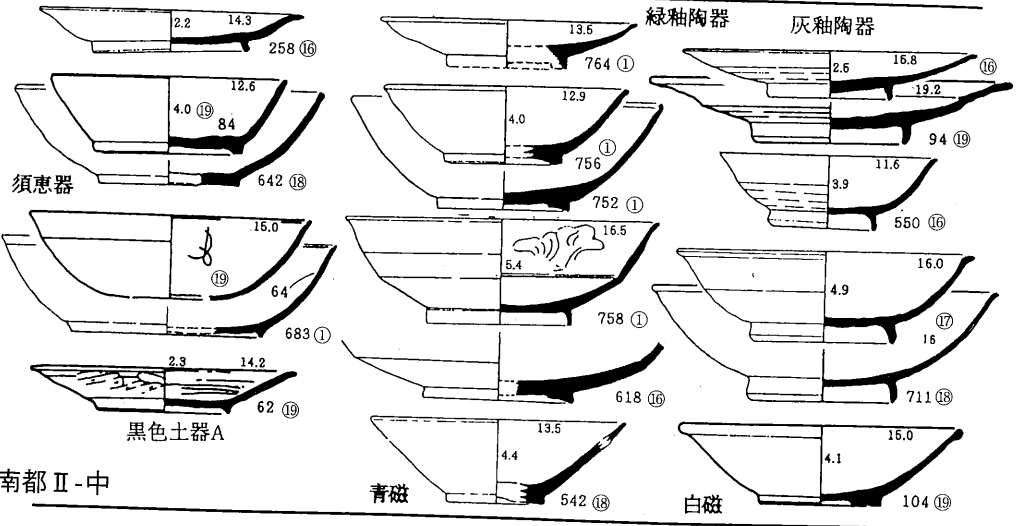
第18图 南都Ⅲ期



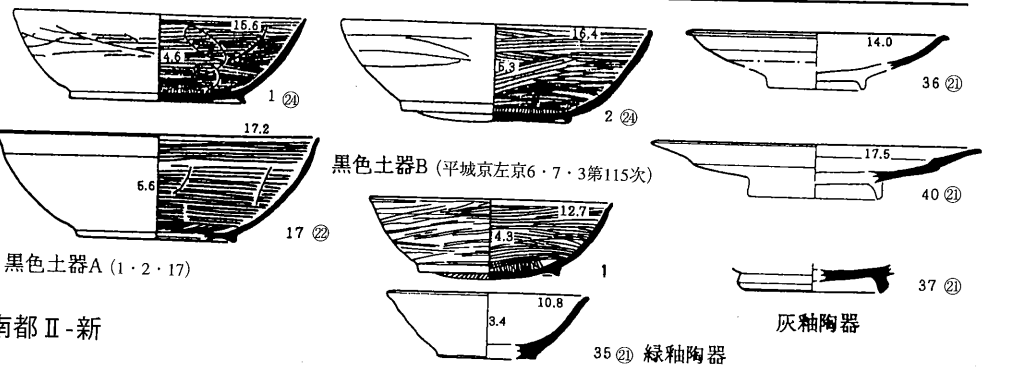
第19図 南都 I 期共伴土器



南都Ⅱ-古

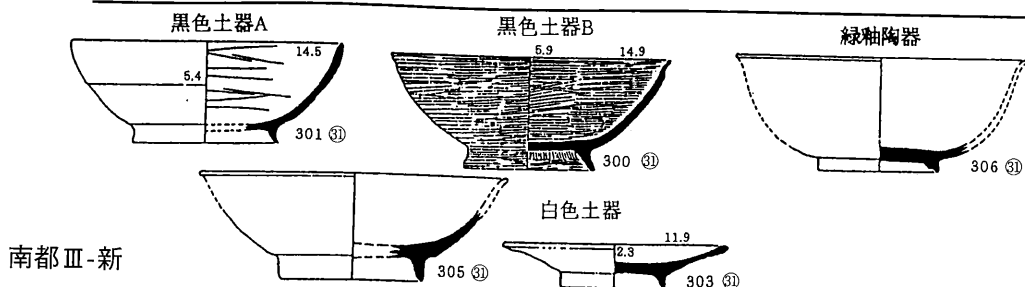
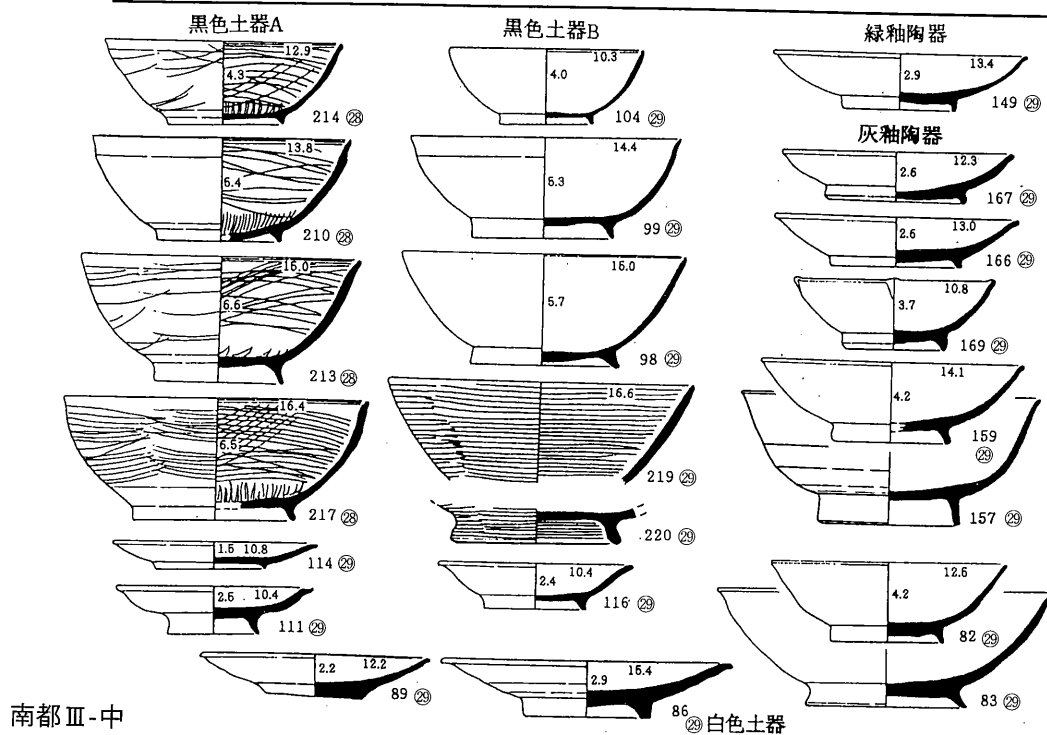
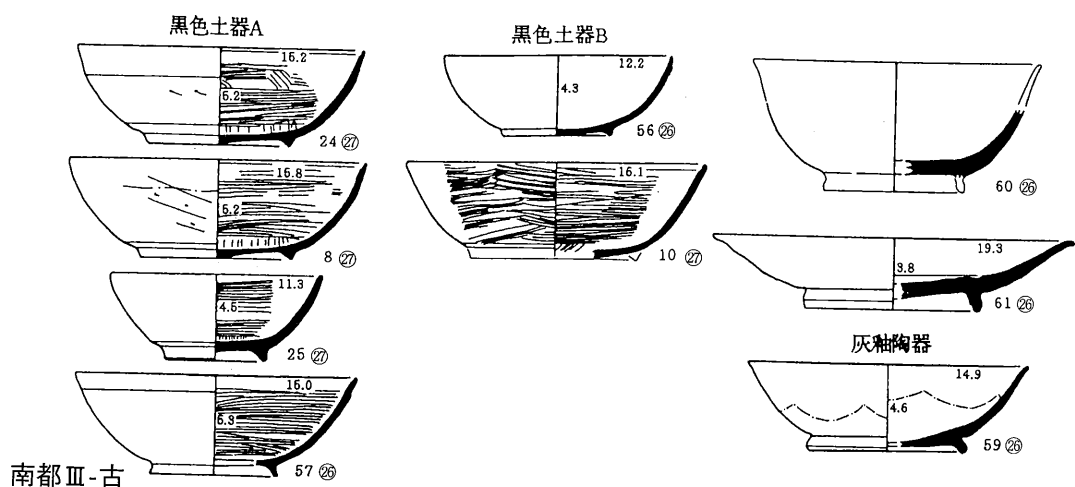


南都Ⅱ-中



南都Ⅱ-新

第20図 南都Ⅱ期共伴土器



第21図 南都Ⅲ期共伴土器